
召還者の異世界奮闘日記

銀野 臨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召還者の異世界奮闘日記

【Nコード】

N8852Y

【作者名】

銀野 臨

【あらすじ】

家でテレビを見つつくつろいでいたらいきなり異世界にトリップした翔子

なんやかんやで1年たちこつちの世界にも慣れてきて元の世界に帰る方法を探しつつ平穏な生活を送っていた。しかしある訪問者によって平和な生活に崩壊の兆しが・・・？

*基本ゆるゆるでお送りします。展開が急かもしれませんがそこは生暖かい目で見守ってくださいと嬉しいです。

プロローグ（前書き）

文才もないのに勢いで書き始めた小説です

ご都合主義で強引で展開が急ではやいかもです

お目汚しにしかならないと思うんですが読んでくださったら幸いです！

プロローグ

タイムマシンがあったらいつに戻りたい？

小学生だった頃友達にそんなような質問をされた記憶がある

あの頃の幼かった私はなんて答えたのかは思い出せない

「きっと漢字テストの前がいいな〜えへへ」
というようなことを言っていただろう

もしも、いや今そんな質問をするような人は私の周りにはいないが
もしも、私が今その質問を投げかけられたら全力でそりゃもう全力
で答えるだろう

1年前のあの日に戻せと

この世界にトリップしてしまった日に戻せと

序章 1

「シチューできましたア！！持ってってください！！！！」

私は大声で叫ぶ。

こんなにビツクリマークつけてしゃべるのなんてこの時間以外はないよなーというどうでもいいことを頭の片隅で考えつつ次のメニューに取り掛かる。

ここはアネット食堂。

小さな町フェーンの隅にある小さな食堂だ。

小さな食堂だが味は確かなので連日客で大賑わい。よってお昼時となると殺人的な忙しさになる。

だって大賑わいなのに店員が私を含めて4人しかいないのだ。今でさえ殺人的に忙しいのに私が拾ってもらう前は3人で切り盛りしていたというのだからその忙しさを考えると鳥肌が立つ。

4

1年前、私はこの世界にやってきた。

その日もいつもと同じように過ごしていたのだ。

訳あって高校生なのに一人暮らしをしていた私はそろそろご飯を作ろうかな？なんて考えながらだらだらとテレビを見ていた。

そして一瞬まばたきしたらこの世界だった。本当に一瞬で来てしまったのだ。

普通異世界トリップする時って神様が現れてくみたくなくだりがありそうだがそんなもん無くいきなりトリップである。要するに説明

ゼロである。

しかもトリップした時間が最高に空気読めていなかった。
場所はアネットさんの家。そこはいいと思う。人の家だしよく小説
に出てくる森とかじゃないし。

しかし！タイミングが悪かったのだ。その日はアネットさんの娘さ
んのお葬式の日だった。しかも弔いの儀という家族以外は絶対に立
ち入ってはならない儀式の最中に。

空気を読めないにもほどがあると思う。

幸いといっていいのかわからないがその時そこにいたのは娘さん
の家族であるアネットさんとアネットさんの1人目の息子のドミニ
クさん、2人目の息子のアドルフくんしかいなかった。

その3人が本当にびっくりした顔をしていたのを覚えている。なん
でも弔いの儀は家族以外は入れないように結界を張るらしい。なの
に私が入ってきたからとんでもなく驚いたと後日言っていた。

まあ私もそれに負けないくらいびっくりしてたけどね！

でも驚きすぎた人間は逆に冷静になるようだ。

私はその例に漏れずものすごく落ち着いていた。普段でもこんなに
落ち着いてねーよってくらい落ち着いていたのだ。なので周りを観
察する余裕が生まれた。

そして余裕が生まれてしまった結果ある考えに至ってしまった。

これは私が好きな小説のジャンルのアレとまったく同じじゃないか？
あの違う世界にレッツゴー！なあのジャンル・・・

い、いやいやいやアレは小説の中だけだっ！ありえないありえないやでも固まってる人たち目の色と髪の色がありえないくらいカラフルだし家の作りも日本と違う。さらに決定的なのはランプらしきものが浮いていたのだ。空中に、フワッとワイヤーも無く・・・

そこまで考えて背中に汗がつつたつたのを今でも鮮明に覚えている。そして私は震えながら質問した。

「ここはどこですか？」

記憶喪失者かっ！ってツッコミが現実逃避のように脳内でとんだ。

序章 2

私の「ここはどこ」発言でアネットさん達3人は我に返ったようだった。

固まり状態からの復活である。そこまではいいんだけどその後の行動が問題だった。なんとまあ我に返ったドミニクさんがナイフラしきものを懐から出したんだよね。

あはは・・・やっぱり普通に懐に刃物入ってる時点で日本じゃないよなあ銃刀法違反してるくらい刃渡り長いし。

私がこんなくだらないことを考えている間にドミニクさんは私のすぐそばまで来ていて刃先を私の首元に向けていました。なんてすばやい行動。

「手、挙げる。余計なことはするなよ？血は見たくないからな。」

もちろんソッコー挙げますよ手。だって怖いからね刃物。平凡な女子高生は刃物向けられたら言いなりになっちゃいますよ。つか物騒なセリフだなオイ。

そんなこと現実逃避じみたことを考えている私をよそにドミニクさんはおとなしく手を挙げた私を縛ろうと柵から縄を取り出していました。

しかも結構太めの縄です。紐とは間違っても呼べないくらい太い。縛られたら絶対痛いです。M気質の人以外は絶対無理ですアレ。ちなみに私はどちらかといえばSです。うん要らない情報ですね。そう、これも現実逃避です。

ってまた変なこと考えている間に目の前に縄がつ！つか私ってさっきから変なことしか考えてないな！！しょうがないかこの状況が変だもんね！！！！

あーでもやっぱり嫌だよこんなの。大人しくしてたほうが良いだろうけどやっぱ嫌だ。私悪いことしてないのに何で縛られなきゃいけない訳さ！そんな趣味は無いんだよ！！

・・・あ、泣けてきた。急に泣けてきたよ私。さっきまで落ち着いてたのにね。グスツ。感情の起伏が激しいんだよね女子高生は。うー人前で泣くなんて屈辱。我慢せねば・・・グスツ。

って泣いても無視かよ！この男は！！か弱い？女が泣いてるのにシカトだよシカト。なんて冷徹なんだ。この悪魔、人でなし、鬼畜ヤローがああああ！！！！

逃げたい。けどもう遅い。縄は私の手首に巻きつけられている。そして縄が縛られる瞬間

「やめなドミニク。今すぐナイフを置いて縄もしまいなさい。」
凜とした声が響いた。

そのときの私は涙で視界が潤んでいたしドミニクさんを内心ののしる事と逃げる方法を考えることに必死だったので一瞬誰が言ったのかわからなかった。というよりここにいる誰かが私をかばうなんて思ってたので空耳かと思ってしまったのだ。

「でも母さん！結界を張ってるのに中に入ってくるなんてありえないだろ！？そんな怪しいやつを捕らえないなんて」

しかし目の前の男が反論しているから空耳ではない様子。まじか。かばってくれる人がいたのか。この声からして1人いた女の人だな。

「いいからしまいなさい。そんな小さな女の子泣かせて……。いい年した大人が何やってるの。」

女の人言う。ああ、なんていい人なんだろう。でも小さな女の子って私一応17歳だけど。まだ小さいのか？

「泣いてるのも油断させる作戦かもだろ！？それに見た目も魔法で変えてるのかもだし！」

鬼畜男（いま命名）も言い返す。確かにごもつともですけどそんなことはありません。

「うるさいよ！もう20年近く食堂やってきた私をなめんじやないよ！悪いやつかどうか見極める目ぐらい持つてるわ！！それとも母さんを信じられないの！？」

とうとう女の人がかぶと鬼畜男が黙り込んだ。どうやら女の人勝利のようである。

言い終えた女の方は私のそばにやってきて微笑みながら言った。

「悪かったね、怖い思いさせて。もう大丈夫だから安心なさい。」

私はさっきまで恥ずかしいとか考えていたくせにその言葉と微笑みに思いっきり泣いてしまった。

序章 3

「ほら、これ飲みな。体が温まるから。」

「ありがとうございます。」

かばって貰って大泣きした私はその後ココアらしき飲み物を飲んでました。

なぜ「らしき」がつくのかと見ただ目も香りもココアなのに味がコーヒーという摩訶不思議な飲み物だったからです。絶対甘いと思ってたのに！苦かったよコノヤロー

「それであんたはどこからどうやってここに来たんだい？」

さっきアネットと名乗った女性が聞いてくる。

い、いきなり答えにくい質問を・・・

まあそこは気になるよね普通。やっぱり正直に答えるしかないよなー私嘘下手だし。へんに嘘ついてても余計に疑われるだけかもだし。

「私は日本という国から来ました。何故ここに来たのかはわかりません。家にいたら急にここに来ていました。」

正直に答えてみた。そして思う。

これ自分だったら警察に突き出すわーと・・・。怪しいことこの上ないよ！

「ニホン？どこだいそこは？初めて聞いたよそんな国名。」

やっぱり聞いたこと無いんですね……。懐からナイフ（刃渡りが長いやつ）が出た時やココアらしきものが出た時点で確信してたけどそう実際にいわれるときついモノですな。

ああ……。トリップ小説読むのは好きだったけどな。体験はしたくないよ。

「あの……。ここはなんていう国ですか？教えてください。」

99、999999%確信しても一応確かめちゃうのが人間です。ここでドイツだよとかイギリスさ！とか言われたら泣いて喜ぶ。いやそれでも十分おかしいけど。自宅から外国もおかしいけどね。

「ここはフェルバンティエって国だよ。この大陸一大きな国さ。」

さて、結論。

ここは異世界です。

だって私はいたって普通の高校生だったから大陸で一番大きな国の名前くらいは知っている。でもフェルバンティエなんて国名聞いたことが無い。

「フェルバンティエ……。そうですか……。すみません私いまから突拍子も無いと言いますが良いですか？」

さて現実を受け止めたら（まだあんまり受け止め切れてないけどね）この世界での協力者を得なければ……。とゆーことで異世界からきたってことを話してみようと思う。だって私が知っている人はここではこの人たちしかいないだろうから。さっきも言ったとおり私は嘘が下手だから本当のこと言うしかないしね。私一回認めちゃえば

結構順応早いんです。それに割り切ることは得意だしね。

話すと決めたけど一応話す前に許可を取ってみた。拒否されたら終わりだけど。

「何を言うつもりだ？」

鬼畜男さんが睨み付けながら聞いてくる。

あ、さつきから全然触れてなかったけどこの人ずつといましたよ。んでずつと私を睨んでました。親の仇つてぐらい鋭く睨まれてました。でも触れても気分が悪くなるだけだから無視してました。この人のこと考えるよりアネットさんと話すほうが有意義だしね！

あともう一人の男の子もずつといます。この子はさつきから私をガシ見してる。穴が開くんじやないかってくらい見えます。そして一言も発さない。謎な子だ……。

「いや、だから突拍子も無いことです。たぶん信じてもらえそうに無いから先に確認をとってみたんですけど……。」

言ってもいいか聞いたのに内容を聞かれては確認の意味が無いではないか！

「話してみなさい。ちゃんと聞くから。」

アネットさん！あなたマジで女神です！！ああ……アネットさんがいないときにトリップしなくてよかった。そしたら普通に縄で縛られコースだったもんね。本当に感謝です。

「えと……じゃあ話させてもらいます。どうやら私この世界とは

違う世界から来たみたいなんです。」

意を決して私がそういうと

3人はびっくりした顔をして再び固まった。

序章 4

「・・・はあ？違う世界だと？何を言っているんだお前は。頭おかしいのか？」

復活を果たした鬼畜男の第一声がこれ。頭おかしいだど！？自分でもそう思うわっ

「私だつてそう思いますよ。でも他に説明がつかないんですよ。私の住んでいたところにはフェルバンティエなんて国無いですし魔法も使えません。この飲み物も飲んだこと無いです。はじめて見ました。」

「そんな理由で信じられると思うのか？」

「思いません。でもこれが事実なんです。あなたたちも日本なんて知らなかったでしょう？でも私はそこで生まれ育ったんです！これは何があっても変わりません！！」

感情が高まって思わず大声を出してしまった。やっぱり女子高生は感情の起伏が激しいようです。いかんいかん。

「異世界？本当に？」

突然聞いたことの無い声が響く。

びっくりしてそっちを見るとさっきまで黙秘を貫いていた少年が口を開いていた。

「本当に異世界からきたの？ねえ本当に？嘘ついてないよね？違う世界から来たの？ねえどうなの？異世界からきたの？」

「う、うん。嘘ついてないよ。違う世界から来たよ。」

いきなり饒舌に喋りだした少年にビクビクしつつ答えると少年は

「じゃあちよつと待ってて！すぐ戻るから。」

と行って部屋の奥に走って消えていった。

残された私たち3人は呆気にとられていると宣言どおりすぐ戻ってきた少年が1冊の本を手にはしていた。

そしてものすごい勢いでその本を差し出して

「異世界からきたならこれ読める？」
と言った。

「アドルフ、それお前がめっちゃめっちゃ大事にしてた本だろ？そんな怪しいやつに見せて良いのか！？こいつが言ってること嘘かもだぞ。」

「うん。学校の先生にもらった大切な本だよ。いま僕は異空間の研究をしていて先生にそのことについて相談したんだ。そのときにこの本をもらった。異世界から来た人が書いたものらしいけど文字がここで使われてるものと違って読めないんだ。しかも不規則すぎて解明もできない。だから僕は異世界からきたっていう人がいるなら読んでもらいたい。」

アドルフくんが話す。

が、そのときの私はセリフの後半を聞いてなかった。だって異世界の人を書いた本だと！？完全に私と同パターンじゃないか！なんかヒントがあるかもしれん。絶対読ませてもらおう！って考えていたからね。

「よ、読みたいです！その本読ませてください。」

私がものすごい勢いでさういってアドルフくんは私に本を差し出した。

私は急ぎつつでも慎重に本を開く。

そこには見慣れた文字が並んでいた。

「これ日本語だ……。これ私の国の文字です！」

日本語の登場に感動して涙が出そうになる。少なくとも私以外にもここに来た人がいると思うとなんだか安心した。

「本当！？じゃあ読んでっ！早く」

感動していたらせかされたので声に出して読み始める。

「えっと、《私がこの世界に来てもう2年は経っただろう。今更だが記録をつける代わりに日記を書きたいと思う。この世界に私が来たのはさつきも書いたように2年前だ。家でくつろいでいたらこっちに来ていたのだ。幸運にも村のすぐそばに落ちたので死なずにすんだ。だが、今でも、もし村の近くにある森に落ちていたら、と思うとゾツとする。私はやさしい村の人たちに拾ってもらっていま

もこうやって生きている。本当に村の人たちにはよくしてもらっている。感謝してもきれない位だ。早く恩を返せるようになりたいと思う。》・・・1ページ目はこれでお終いです。」

読んでみて私とまったく同じだと思う。私も本当に一瞬でこっちに來てしまったのだ。おなじでホツとする反面2年も戻れてないと書いてあったので落胆する。やっぱりすぐには帰れないらしい。

「そんなことが書いてあったのか・・・。ねえ続きも読んで！」

どうやらアドルフくんは信じてくれたっぽい。彼がこの本持っててよかったわー。

「アドルフは信じてるみたいだけど俺はまだ信じてないからな。本当は読めて無くても読めてる振りしてる可能性だってあるんだ。」

そついやまだ一人いたよ！しかも一番手ごわいのが。

鬼畜男さーん！まだいいですか！もういいじゃないですか。せつかく信じてもらえる雰囲気だったのに台無しだよ。

でも、この男のいつてることも一理ある。実際私が読めている保証などどこにも無いのだ。

「確かに私が読めている保証などどこにも無いです。でも本当に読めてます。信じてください」

私ができることなんて信じてくれというだけだ。あーあせめてあつちの世界のものを持ってきてきたらな。証明になるのに。いま証明なんてできないよ。

「じゃあ書いてもらえばいいんじゃないか？その本に載っている文字を。スラスラと書ければ彼女は本当にその文字を使っていたのだろつ。今の短時間で覚えるのは無理だったろつし。」

そういつてアネットさんが紙とペンを差し出す。

「……ナイスアイデア！アネットさんもうあなた最高です。本当にさっきからありがとうございます。」

私は受け取った紙にペンで《私は異世界から来ました》と書いてみた。

「書きました。どうでしょうか？信じていただけますか？」

もう本当にいい加減信じてほしい。そう思っつていつもよりスラスラ書いてみました。

「……うん。字の形とか同じだね。なにより書きなれてる感じがあつた。ドミニク兄さん、彼女は異世界から来てるよ。僕が保障する。」

アドルフくん！あなたも最高です！！

「……アドルフが言つようじゃ本当なんだろうな。普段こいつは口数が少ないがその分嘘をつかねーから。…….わあーつたよ信じるよお前の言つこと！」

うおー！感無量ですわたくし！とうとう全員が信じてくれました。長かつた（？）戦いも終わりです。ありがとうございます鬼畜男！

序章4（後書き）

ビックリマークが多いですね。すみません文才がないからこうやってごまかしてるんです（笑）読みにくかったらいつてください。どうにかするので。

読んでくださってる方ありがとうございます。次でこの過去の話は終わりになると思います。ああ、早く現在の話書きたい。

序章5（前書き）

泣きたいです。一回書いた原稿がきれいに消えました。

やっぱ一日に2回更新なんて無茶しようとするからですかね・・・。

消えちゃったけどがんばります・・・。

序章 5

ようやく3人に信じてもらうことができました。

だがしかし、私の危機的状況は何一つ変わっちゃいない。あ、いや命の危機は去ったから変わったっちゃ変わったがこの異世界でどう生活していくかが何も決まってるない。

ちなみにいま、私の頭に浮かんでいる案はアネットさん達に住み込みで働くことができるところを紹介してもらうことだ。今のところこれ以外浮かばないのでこれでいくしかないだろう。早速聞いてみるか！

とそこまで考えて時に気づく。
私に乗ってなくてね？名前いってなかったよ。一応言った方がいいよね。

「あの、今更なんですがいままで乗らずにすみません。私の名前は海野翔子です。海野が名字で翔子が名前です。」

「名字！？お前貴族なのか？」

鬼畜男さんが言う。え？貴族？うちはバリバリの一般庶民です。

「いえ、違います。貴族なんて身分じゃないです。こっちの世界では名字があると貴族なんですか？」

「ああ、名字は貴族様しか持つことができななんだ。ところでもう一回名前いってもらえるかい？聞き取れなくてさ。悪いね。」

「あ、いえ。翔子といます。しょ・う・こ」

「シヨウコーウ？」

「いえ、しょ・う・こです。」

「シヨークオ？」

「……………どうやら私の名前はこっちの世界では発音できないらしい。」

「あ、じゃあシーって呼べますかね？」

「シーっていうのは私のあだ名だ。海野の海から来ている。」

「海＝sea＝シーである。センスについては何もいわないでくれ。考えた友達が不憫だ。彼女は3日3晩考えた末にこのあだ名にしたのだ。」

「シーかい？これなら問題ないね。」

「よかった。友達よ！いまここでお前の努力が役に立ったぞ！！」

「さてずれてしまったが本題に戻ろう。」

「アネットさん、このあたりで住み込みで働けるところはありませんかね？私でもできそうなもので。」

「え？住み込みで働くのかい？……………ああ、一個あったね。住み込みで食費免除で休日もあるところが。」

なにその好条件！？好条件過ぎて怖いくらいである。

「どこですかそこ！？教えてください！！！！！」

アネットさんはにやりと笑って言った。

「ここ、アネット食堂さ！」

こうして私はアネット食堂で働くことになった。

ちなみにこの後ドミニクさんの猛反対劇とかがあったけど割愛。
決めてめんどくさいからじゃない。決して。

さらに私がお約束のごとくチートで魔力がいっぱいあって制御に時間食ったとか、その制御法を覚えてくれたのがドミニクさんで結果仲良くなったとか、アドルフくんが天才過ぎて王都にあるこっちの世界で言う大学に飛び級で学費免除で行くことになったとか、あったけどそれも割愛！

うん、結構大事なことだったね。割愛しちゃったけど。

一応補足しておくといまや私とドミニクさんはめちゃくちゃ仲良しだ。私は何かあったらまずドミニクさんを頼るねってくらい仲良く

なれた。鬼畜男って言ったのが懐かしいくらいだ。

アドルフくんは王都に先月行ってしまったが1週間おきに手紙が届くし、私とは念話という私オリジナルの魔法でほぼ毎日話しているので寂しくは無い。

まあそんなこんなで海野翔子こと、シーは異世界ライフを堪能(?)しつつ元の世界に変える方法を探しています！

序章5（後書き）

おわった！過去編終わりました！！

データ消えた時は泣きそうでしたが無事過去編終わりました。

これから現在が始まるので読んでくださるとうれしいです。

表紙／タイトル

「今日はお疲れさん。夜は特に忙しかっただろうか？大丈夫かい？」

仕事が終わって夜、アネットさんが声をかけてくれる。

今日はアネットさんが言ったとおりものすごく忙しかった。なんでも町の騎士団の給料日だったらしくみんな外食にしたらしい。食べ盛りの男共がわんさか来て疲れしました。

私は厨房で働かせてもらってるのでめんどくさい騎士たちの相手をしなくてすむがフロアのほうで働いているマリーさんとフェイトさんは大変だっただろう。ああ、マリーさんとフェイトさんというのはアネット食堂の従業員さんのことです。お二人とも美人で優しいお菓子をくれるいい人です。

そして騎士たちは隙あらばフロア担当のお2人を口説く。なんでも出会いが全然無いらしい。私もヘルプでそっちに出たときにもううんざりするくらいお世辞を言われた。アレは本当に鬱陶しかったなあ。日本人は褒められ慣れてないんだよ。耐えている2人はすごいと本気で思う。

あ、ちなみにドミニクさんもこの騎士団で働いています。でも彼は実は彼女さんがいるので口説いたりしてませんよ。

そこで私はさつき書いたとおり厨房で働かせてもらってます。元より一人暮らしだったんで料理は得意だったんです。さらに前作ってみてといわれたので作ってみた私の世界の料理がアネットさんの舌

をうならせましてそれ以来店のメニューに入りました。よって私はコックさんです。1年前は女子高生だったのにな……。

今のところメニューに入ってるのはシチュー（ちょっと意外なことにこっちはシチューが無かった。スープは普通にあるけど。）と肉じゃがもどき、プリンもどきにアイスもどきである。

なぜシチュー以外「もどき」が付くのかというと地球とは食材が違うからである。

ジャガイモなんて無かったのです。なので肉じゃがもどきにはジャガイモと食感はずっとおんなじなのに色が青色って言うなんかものすごい野菜“ヒューレ”を使っています。なので肉ヒューレになっちゃうのだ、本当は。

それはなんか嫌なのでそのままの名前でやっているけど時々みんなに「じゃがつて何？」って聞かれる。そのたびごまかしてるけど。つつこんじゃいけないことも世の中にはあるってことさ。

私的にはアネットさんの料理のほうがおいしいんだけどねー。私の雑な料理より確実に。アネットさんの料理はマジ神です！どんなにお腹空いてなくても食べれちゃうんだからもう魔法だよな。

あ、そうそう魔法といえば私はもう一個お仕事してます。チートな能力を使って魔法で便利屋さんを。

魔法がなければ解決でき無そうなことを解決するのが仕事内容。小さな女の子から依頼で木のてっぺんに引っかけた帽子をとってくれ、から騎士団の依頼で町に盗賊が来たので捕らえるのをてつたってほしいなど、ものすごく幅の広い便利屋をやっています。

これをはじめたのはせっかくあるチート能力を生かしたかったのとアネットさんにお世話になりっぱなしだったので食費ぐらい入れたいと思ってだ。はじめて半年たつが結構好評である。

「それでシー。あんた昨日さ明日から日記つけるって言ってたけどつけたのかい？」

アネットさんに再び話しかけられる。

ほえ、日記……？あ！忘れてた……

「え、えへ、忘れてました。今から書いてきます！そのまま寝ちゃうかもしれないんですよ。おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。私ももう寝るかな。じゃあ明日もよろしく頼むね。」

「はい！」

階段を駆け上がりながら返事をする。

私の部屋は3階建てのアネットさんの家の最上階、3階である。前はアドルフ君と相部屋だったけど今はアドルフくんがいなくなったので一人で使っている。

んでその向かいにある部屋がドミニクさんの部屋。2階はリビングとアネットさんの部屋がある。1階はもちろん食堂だ。

階段を上り終えて部屋の戸を開ける。

私は机の上においてあるペンとノートを手を取った。

もう1年経っちゃったけど私は日記をつけることにした。もし私みたいな人がまた来た時の為だ。私はあの異世界人の日記のおかげで生きているといってもいいくらい日記に恩があるので私ももし役立つたらと思って書くことにした。本当はもつと前からそう思っていたのだが、なかなか忙しく書き始められなかったのだ。

「さて、タイトルは何にしよう？」

一人なのをいい事に独り言を言ってみる。だってなんか喋ったほうが思いつきそうだったからね。

「うーん、どうせならそのタイトルだけで内容がわかるようにしたいよなー。うーん……」

私は悩む。タイトルなんてそんなに大事じゃないんだがなんだかこたわってしまう。

なんとなく私のシーというあだ名に3日3晩悩んだ友達の心がわかった気がした。

「うーむ……。よしっ！これにしよう。」

私は日記帳の表紙にでかかど日本語でタイトルを書く

《異世界トリップ者の異世界奮闘日記》

「よし！あんだけ考えて結局なんのひねりも無いけど良しとしよう
！さて早速書くかな、中身。」

こんな風に日記を書き始めた頃の私は知る由も無かった。
この平穩であたたかな日常に終わりが来ることを。

表紙のタイトル（後書き）

すみません。サブタイトル変えることにしました。この話を表紙にして次から1ページにします。前の話は過去編1とかに変更します。急にすみませんでした。

その訪問者は本当に突然やってきた。
そして私の平穏な日常を崩していったのだ。

その日は私が日記を書き始めて10日くらい経った日だった。

「シーちゃん！今度俺とお茶しようよ。もちろん俺のおごりだよ。」

「おごりとか言って後悔しても知りませんよ。私ものすごい食べるからー。ハイッ！肉じゃが定食です。ちゃっちゃと食べて仕事行かないと怒られますよ?」

「う、こんなときまで仕事の話は出さないでくれよ。食事の時まであの地獄の訓練を思い出したくない。」

そういつて青ざめた客の一人、騎士の口ウフと軽口をたたきつつ次の料理を運ぶ。

今日はフェイトさんが風邪を引いてしまったためお休みで私もフロアのほうも手伝っているのだ。おかげで歯の浮くようなお世辞を言

われすぎてゲツソリです・・・。

このロウフにもお茶に誘われたがもちろん断りました。めんどくさいしね。まあロウフ相手だったら気が楽そうだけど。こんな風に軽口たたけるし。にしても今日も騎士が多い日だなー。給料日はこの間あったばっかなのに。もう忙しいんだよ騎士がいると。

そんな感じで忙しいけど和やかな雰囲気だったのだ。

だが、次の瞬間この雰囲気がぶち壊しになる。

ガチャン！！リリリリリリーン

急にものすごい勢いで店のドアが開けられる。リリリリリリリーンはドアの上についているベルが鳴る音だ。地球にもあったけどこっちにもあるなんて最初は驚いたものだ。普段普通に開けるときはリーン位しか鳴らないのに今のはものすごい鳴ったなオイ。

っーかその扉は寿命が近づいて来てるから勢いよく開けられると壊れるかもなのよね。壊れたらどうしてくれんのよと思いちよつと文句言つてやろつとその勢いよく開けた主を見てみた。

そこには童話に出てくる王子様たちも裸足で逃げ出すようなめっちゃくちゃ美形の王子様がいました。

私はそのイケメンぶりに啞然としつつもその王子様を観察する。

格好は王子というよりは騎士に近い感じの服装であった。帯剣して
るし。ちゃんと防具つけているし。でもそこにいる啞然としていて
アホ面のロウフとはまた違った感じである。なんかこうもつと高貴
な感じ。王様に仕えていそうなイメージである。

この服装も十分すごいが顔がさらにすごかった。いい意味で。

豪華な服装に負けないくらい、というか服装を見事に引き立て役に
しているくらいのイケメンさ。髪の色は金髪で目は碧眼。あこのラ
インはスツとしていて鼻筋も通っている。町を歩いていたら10人
中10人の女性全員が振り返りそうなくらいの美形だ。

はー・・・まさに王子だわー。とか考えながら声をかけてみる。

「いらっしやいませー。お一人ですか？」

声を掛けられたことに気づいたのかその王子が振り返る。

そして私を見て一瞬目を見開いた。

ん？なんか驚かれるような格好はしてないけどなー。

と思っていたが一つ私はこの世界の人と違うところがあったのを思
い出した。

あーあのこと思われてるのか。なら先手を打つところと思い声を出
す。

「あの、驚かれていますようですがもしかしたらこの黒い髪の毛と目
のことですか？この2つは生まれつきなのでもし気分を害されたな
ら申し訳ありませんがほかのお店に・・・は!？」

私がセリフを中断したのは訳がある。なぜだか知らんが王子（仮）
がいきなり私に跪いたからだ。

え？なに？何やってんのこの人？
周囲もいきなりの行動に啞然とする。

「あ、あの何やってるんですか？顔上げてください。」

私がそういうと王子（仮）は顔を上げて言った。

「我らが巫女姫様みこひめひめさま、おかえりなさいませ。僭越ながらわたくしがお
迎えにあがりました。さあ城に戻りましょう。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？こいつどづしたの？

巫女？姫？何を言ってるんだ王子（仮）よ。

周囲の心が一つになった瞬間である。

1ページ（後書き）

主人公は騎士たちの言葉をお世辞だと思っ
てますが実際、彼らは本
気で言ってます。特にロウフは本
気です（笑）

シーこと翔子の見た目は黒髪、黒
目で髪は腰ぐらゐまで伸びていま
す。また身長は152cmとちょっと小
さめですがスタイルもよく
出るところ出てます。顔もかわい
いです。

なのでモテるんですが気がつか
ない彼女……。

騎士たち、不憫！（笑）

「いや貴方様は巫女姫様です。」

「いやだから違っつてば!」

「そんなことございません! 貴方様は巫女姫様なんです! いい加減お認めください!」

「あーもっつだから! 私は巫女ひーシー、落ち着きな。」
「アレン、冷静になれ」

私のセリフに2つの声が入り混じる。

一つは聞きなれたアネットさんの声。

もう一つは聞いたことの無い男の人の声。

その2つの声に反応して私たち2人も動きを止める。

「シー、とりあえず落ち着きなさい。その騎士様も。」

アネットさんに言われて私は急に恥ずかしくなる。だって店にお客さんがまだいたからね。今の見られてたのか……。うん、恥ずかしいね。

とゆーかこの人やっぱり騎士だったんだ!。王子顔なのに……。

「いきなりうちのものが暴走して失礼した。非礼をわびよう。それで我々はそこにいらっしやる方に話があるんだが、お借りしても?」

さっきの男の人の声が食堂の入り口から響いた。

慌ててそっちを向くと、そこにもイケメンがいました。

服装はさっきの王子（仮）と同じで、髪の色が紺色だった。目の色は緑でこれまた顔が見事に整っている。さっきの人もこの人も2人ともイケメンでかつこいいんだけどタイプが違う感じ。

この紺色の髪の人はなんかこう美人なかんじである。かつこいいし美しいんだけど明らかに自分より綺麗だから隣に並びたくない感じ。神秘的な雰囲気がある。

つてイケメン観察してる場合じゃないよね。質問されてるんだから答えねば。

「いえ、別にお気になさらず。私もですから。でも今、話というのはちよつと無理です。仕事中なので。食堂が9の刻に終わるのでその時いらしてくださいですか？」

そっちが勝手に訪ねてきたんだから時間ぐらい融通しろよオラって
という意味をオブラートに包んでみた。これなら失礼じゃないよね・
・？

「了承した。ではまた9の刻に訪ねさせていただきます。いきなりすまなかつた。」

それだけ言うとイケメン2人は去っていきました。

・・・なんだつたんだあの人たち？

なぜだか分からないが私はとても不安な気持ちになった。

なんだか急に歯車が狂い始めたような、なんともいえない気分にな

ったのだ。

何事もなく終わればいい。どうせ人違いだよ。

そう言い聞かせて扉のほうから呆然とした空気が漂う食堂内に戻った。

2ページ（後書き）

9の刻^くって言うのは9時のことです。時間はこっちと同じで24時間制になってます。ただ9時とは言わずに9の刻といいます。6時だったら6の刻です。

何分って言うのは単位がなく12時30分の事だったら12の刻の30といます。

といってもこの世界の人たちはほとんど太陽の沈み具合で時間をチエックしてるのであんまり時計とかは普及してません。貴族が懐中時計持つてるくらいです。

サイレントツッコミは心の中での突っ込みです（笑）彼女チキンなので声には出さないんです。

「先ほどはまことに失礼いたしました。つい、巫女姫様を拝見できたことに喜びを感じ冷静さを失ってました…。」

アレン、と名乗った騎士は名乗り終わった直後にそんなことを言った。

まだ引きずるのかソレ。

今は9の刻。私は昼間いきなりやってきた騎士さん達2人と向かい合っている。

この2人が去った後食堂内はすごい騒ぎだった。

大丈夫か？と心配してくれるみんなには「きつと人違いだから大丈夫！心配しないで」と言ったが実際めちゃくちゃ不安です。つか怖い。チキンですから！！

一応騎士であるロウフから聞いた話によるとこの人たちは王城に仕えている騎士で、その中でもトップの1番隊の人たちみたいだ。なぜ1番隊が分かったかというど何番隊かは防具で見分けがつくみたい。

ああ、そんなお偉い方が私に何のようなのよ、マジで…。

内心ビクビクしながらもそんな様子は表には出さない。あんなたちになんかビビッてませんけど？っていう雰囲気をもし出す。これは食堂で働くことになったときにアネットさんから教わったこと

だ。どんなに怖い客が来ても決して表には出さないこと。出してしまったらなめられるからだそう。

私はそんなことを思い出してちょっと遠くのほうに座っているアネツトさんをチラリと見る。

そうしたらアネツトさんは私を安心させるように微笑んでくれた。隣にいるドミニクさんも頷いてくれる。

そんな2人を見たらだいたい落ち着くことができた。よし、とりあえず誤解をとこう。

「いえ、先ほども申しましたがお気になさらないで下さい。私もでしたから。それと何度も言うようですが、私はただの町民です。巫女様というようなものではございません。」

ちゃんとハッキリ言えたー！これで大丈夫だろう。だいたいさー私はトリップしてきたわけで召喚された訳でもないんだしそんなねえ……。大層なお役目なんて無いでしょう。小説でも勇者とか姫とかは大体召喚されてたしー。

そう思っていたらさつきレイと名乗った騎士さんが口を開いた。

「いえ、あなたは巫女姫なのです。黒い瞳と髪をお持ちだから。」

またでたよ！黒髪と黒い目。確かに私は目も髪も黒いけどだからなんなわけ？日本には山ほどいるわっ！なのにそれ持ってたら巫女姫って単純すぎないか？とゆーかまず、巫女姫って何？さまざまな疑問が脳内を渦巻く。

「あのさつきから黒髪と黒い目のことを言ってますけど何なんです

か？あと、巫女姫様って何なんですか？」

思ったことをそのまま口にしてみる。気になったことがあつたらす
ぐに聞かないとね。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥さ。

すると今度はアレンさんが話し始める。

「そうですね……。巫女姫様がどんなお方かを説明することにな
ると少し長くなってしまふんですが大丈夫でしょうか？」

確認を取るほど長い話なのかよ。どんだけ長いんだよ。と再びサイ
レントツツコミ。でも聞かなきゃ始まらないんで聞くことにする。

「大丈夫です。お願いします。」

私がそういうとアレンさんは頷いて話し始めた。

3ページ(後書き)

巫女姫についてを入れようとしたらめっちゃめっちゃ長くなってしまったんで2個に分けました。次回、巫女姫が何なのか、とか翔子は本当に巫女姫なのか?とかが分かります! 多分

4ページ(前書き)

今回、長い上に説明チックです……。すみません。
流し読みでも多分きつとおそらく大丈夫です！

4ページ

昔、昔、ある王族に女の子が生まれた。

彼女はこの世界を作った神と同じ黒い目と黒い髪を持っていた。

彼女はとても成長が早く4歳にして高難易度の魔術を扱い、周りの人たちから神の御子といわれ称えられた。

彼女は周りに応えるかのようにどんどん成長していった。

10歳になるころには彼女に魔術で勝てるものは誰もいなくなった。

周りの人たちはさらに彼女を褒め称え、畏れ、敬った。

13歳の頃、彼女は自分の様々な能力をみんなのために生かしたいと思った。

彼女はそれから毎日神様に祈りをささげていた。

世界が平和になるように、みんなが幸せに生きていけるように、と。

その姿から彼女は神の遣いの巫女のようにだといわれ、彼女は巫女姫様と呼ばれるようになった。

そしてそんな彼女は祈るだけでなく、行動を起こした。

まず、彼女は自国の腐りきった王宮を改革した。
彼女が16歳になった時だった。

次に、彼女はこの世界から戦争をなくそうと努力した。

彼女の努力のかいあって全てとはいかないが戦争はこの世界からほとんど姿を消した。

世界の人々は彼女に感謝した。様々な品を送り、感謝の気持ちを表した。

そして、それと同時に彼女を追い詰めた。

『もっとこうしてくれ』『何でその国ばかりかまうのか』『神の御子ならこのぐらいできるだろう』といいもつと多くのものを求めた。

彼女は徐々に追い詰められていった。

なぜなら彼女は人間だったから。

彼女はちよつと人より魔術の腕が優れていて、髪と目の色が黒い、正義感のある人間だったから。

でも、そんなことを理解してくれる人などほんの一握り。

次第に彼女の心に傷がついていった。

ある日、彼女は決意し世界中の人々に向けてこう言った。

「私は、ただの人間です。貴方たちと同じ人間なのです。神の御子などではございません。人間なのです。なので、こうしてほしいと言う貴方たちの願望を全てかなえることはできません。もちろん努力は致します。ですが無理なこともあるのです。どうか理解をしてほしい。」

彼女は混乱を招くかとも思ったが、自分が本当に壊れてしまう前にみんなの理解を得ようと、まだちゃんと自分を保っているうちに理解してもらいお互い分かり合えるように、と思いをこめて言った。

しかし、人々の反応は彼女を裏切った。

『今さら神の御子じゃないなんて騙していたのか』『なんて無責任なの』『私たちを見捨てるのか』

人々にとって彼女が世界のために尽くすのは当たり前になっていたのだ。

彼女は本当に壊れてしまった。

彼女は本当に理解してくれている人も会わなくなっていた。一人部屋にこもり、祈りを神にささげるだけの生活になっていた。

ある日、彼女がいつものように祈りの間で祈りをささげていると、どこからか声がした。

人間は愚かだね。君は彼らを助けたいと思うかい？人はこの世に必要か？

突然の声に驚きつつ、彼女は答えた。

「確かに、人は愚かです。でも、そうだとしても私は彼らを助けたいです。……。ですが今の私にはそれができません。心が壊れてしまったから。今の私はもう彼らを信じることができないのです。そんな私が助けるなど……。」

……。そうか。では君が助けたいと思うなら、私は彼らにチャンスをやることにしよう。人を滅ぼすのをやめる。君に免じてね。それには君の協力が必要なんだ。協力してくれるかい？

彼女は「はい」と答えた。彼女はこの声の主が神であることはなぜだか自分でもわからないが知っていた。

次の日、彼女は再び人々に声を飛ばした。

「私は、この世界が好きでした。でも今はこの世界を、人々を信じることができません。なので私は1回休みます。」

昨日、神様から私はお言葉をいただきました。私を違う世界に飛ば

してくれるそうです。私は200年間その世界で過ごします。貴方がたは200年間で、私が信じたいと思う世界にしてください。200年後、私は今の私とは変わってしまうかもしれませんが、でも必ず戻ってきます。

もし、再び私が信じられる世界になっていたら神はこの世界を一生守護してくれるそうです。

……では200年後までさようなら。私の愛すべき世界よ。」

こうして彼女は这个世界から消えて別の世界に去っていった。

人々ははじめは彼女が裏切ったと罵っていたが、すぐに気づいた。

彼女の存在の偉大さに。

彼女が消えたら、世界の国々はすぐに争いを起こした。仲介してくれていたパイプを失いまた戦争が繰り返されそうになった。さらに彼女が張っていた結界がなくなり、魔物と争うことも増えた。世界は再び混沌の中に落ちた。

しかし、人々は彼女の言葉を思い出した。

そうして決意した。彼女に信じてもらえる世界を作ろうと。

そして、その日から1999年経ったある日、突然祈りの間で祈っていた神官長に声が届いた。

来年、巫女姫をこの世界に召還する。黒髪で黒目の者がいたらそいつがそうだ。場所までは特定できないが絶対見つけ出してやれ。

神官長はすぐさま王に報告した。王は秘密裏に彼女を探す計画を立て、実行した。

そうして見つけたのが貴方様なのです。巫女姫様。

アレンさんの話をまとめるとこんな感じだった。うん長いね。

これでも十分長いけどちゃんと略したんだよ？

だってアレンさんの言い方がいいからさ、これの倍くらいの文章になっちゃって……。聞いてるほうも疲れた……。

さて、この話を聞いて私がまず思ったこと。

これ絶対私じゃねー！こんな聖人みたいな性格してねーよ！！！！

思うことがこれって自分で悲しくなった。

「納得していただけましたか？黒髪と黒い目が持つ意味を。貴方が巫女姫様であることを。」

レイさんが言う。

うん、そうだね。納得したよ！

「……なあって言うと思ったかああああああ！！！！
納得できるわけねーだろ！私はそんなすごいお姫様じゃないっつーの！」

私は生粋の日本人じゃああああああああ！！！！！！！！
そう思ったけど実際に口から出た言葉は

「そのお話は理解できましたが、自分はそんな素晴らしい方じゃありません。」

「……ええそうです。何度も言うように私はチキンなんです。サイレントツッコミしかできないのですよ……。強そうな騎士2人を前にしてそんなことがいえるわけが無い。」

「いやいやそんなご謙遜を……。巫女姫様は十分素晴らしいです！さあ巫女姫様、王城に向かいますよ。」

オーイ！だれかーこの話の通じない騎士どうにかしてくれー！
どんだけ王城行きたいのこの人……。

そついや、話を聞かない騎士（名前で呼ぶのもいやなので名前消去）の言っていたことと私の人生では矛盾というか辻褄があわないところがあるよね。

「だいたい私はまだ17歳です。200年っておかしくないですか？」

私はまだピッチピチの10代ですもん。200歳も生きてない！つか日本で200歳まで生きれたらテレビ出れるぞテレビ。

「それはこつちの世界と時間軸が違うからだ……です。」

だです？あ、レイさんがとうとう敬語じゃなくなってきた。最初からこの人敬語苦手そうだと思ったけどとうとうボロが出てますね。無理してるなあー。

じゃあ彼のことは敬語で話せない騎士でいいや。

つてそつちじゃなくて、時間軸のほう。……さすが異世界としか言えないけど。じゃあこつちの1年間と地球の1年間だと違つて事が……しかもこつちのほうが長いのね……
つて、ん？じゃあ私つてめっちゃめっちゃ年とってない？帰ったとしても……

「え！？それつてじゃあ私が地球に帰れたとしても私めっちゃめっちゃおばあさんになつてるわけ！？」

思わず自分の思考回路にびっくりして声を上げる。

「まあそうなりますね。でも巫女姫様は元々こちらの人間ですのお戻りになることは無いかと……。」

話を聞かない騎士が言う。

そっかー帰らないなら安心！

って違う。ノリツッコミしてる場合じゃない。

急に頭の芯がスウツと冷えてくる。

帰らない？それはつまり

「そ、れは要するに帰れないって事……？？」

声が震えてしまった。私地球に帰れないの？

敬語で話せない騎士があっさりと答えた。

「ええ。おそらくもうあちらに行く必要は無いと思われるのでそちらの世界には行かないかと。……み、巫女姫様！？どちらに!?!？」

話の途中だったが思わず駆け出してしまった。

全力で階段を駆け上がって3階まで行き自分の部屋に入る。

「はあ、はあ、はあ……。」

この世界に来てからはだいたい体力がついたと思っていたのに階段駆け上がってだけで息が切れていた。

まあ今聞いた話が衝撃的過ぎて体がおかしくなってるのかもしれないが。

ドアに鍵を掛けて座り込む。

あの騎士たちは私が帰らないといていたが、つまり帰れないのだろう。

「私、帰れないの？地球に」

思わずつぶやいた。

この1年間アネットさんのところで働きながら帰る方法についていっぱい調べた。

あの私を救ってくれた日記を書いた人を探したり、町の本屋さんに行ったり、たまに来る旅人の人に話を聞いたり、ちよつと危険だったけど冒険者の人にも話を聞いた。

結局帰る方法は見つからなかった。

でも誰も絶対にそんなことは無いって言わなかったからきつと帰れるって信じていたのに。

信じていたのに……………。

「……………ああ、かえれ、ないんだ。もう帰れない。戻れない。」

言っている途中で涙ぐんでくる。

もう帰れない。戻れない。地球にはいけない。

声に出したせい、そんな現実が一気に襲いかかり堪えていた涙が流れ出す。

私は声の大きさも気にしないで大声で泣き続けた。

5ページ(後書き)

今回は後半シリアスですかね・・・？そのうえ短い・・・
。。
前回説明チツクだったので今回面白くしようと思ったのに失敗で
すー。。。。

ああ・・・早くコメディーっぽいのが書きたいです。

どのくらい時間が経ったのだろうか？

あれから私はずっと部屋で一人泣き続けていた。

泣いたって仕方ないと分かっているても涙は止まらなかった。

もう軽く3時間はたった気がする。いい加減泣き止まなきゃなと思っ
ていたら部屋のドアがノックされた。

「シー、温かい飲み物を入れたから飲みにおいで。」

アネットさんが優しい声でそれだけ言い、下におりていった。

アネットさんのその声を聞き、これ以上心配かけてはならないと思
い下におりる事にした。

あー、目死んでるだろうな。まぶたがやばいもんな。などと考えな
がら階段を下る。

下り終えてリビングに入ったら直ぐに

「シー！！体冷えてないか？上は寒かっただろう？」

と、ドミニクさんが声をかけてくれた。

下手に大丈夫か？なんていわずに体の心配をしてくれる彼の気遣い
がうれしくて再び涙腺が緩みそうになる。

「うん。平気。ありがとう。」

そういつとアネットさんがキッチンからやって来てカップを3つテーブルに置いた。

「平気なんていつてるけど冷えてるに決まってるだろう？ほら、早く飲みなさい。」

そう促されて私は椅子に座った。

目の前で湯気を立てているチョコルという飲み物を飲んだ。そういやこのチョコルって私がこの世界に来たときにアネットさんが入れてくれたココアみたいなコーヒーだ。そんなことを考えてまた思考が地球のことに向いてしまう。

これじゃダメだ。そう思っただけで思考を切り替える。状況を確認してアネットさん達と話し合わなきゃ。

「あの騎士たちは帰ったの？」

「ああ。お前が部屋に行っただけで1刻ぐらい粘ってたがその後帰ったぞ。また明日来るっていつてたが……。」

また来るのか……しつこいな本当に。明日来るって事はそれまでに考えをまとめなきゃってことだな。それも急がなきゃけど、とりあえずはアネットさん達に謝ろう。心配かけたし迷惑もいっぱいかけた。

「あの、ごめんなさい。心配も迷惑もいっぱいかけて……。」

そういつたら2人は笑いながら

「そんなの当たり前だろ？家族なんだから。」

「そうさ。別にいいんだよ。家族に遠慮なんて要らないんだ。それに迷惑なことなんて無いよ。」

と言ってくれた。

ああ、なんていい人たちなんだろう。この人たちのところに落ちてよかった。心からそう思える。

まあ最初はドミニクさん怖かったけど。

「2人ともありがとう。それでこれからの事なんだけどどうしたらいいかな・・・」

「うーん、そうだな。お前はもうどうしたいんだ？それによって変わってくるぞ。シーは地球だっけか？に帰りたいのか、このアネット食堂にいたいのか、王城に行きたいのか決めなきゃな。お前が好きな選んでいいんだぞ。なあ母さん。」

「ああ、もちろん。シーがしたいようにしなさい。私達に気を使わなくていいんだよ。」

ああもう、この2人は私を泣かせたいのかね・・・。優しい言葉ばかりで泣きそうだ。せつかく泣き止んだのに。

決めた。本当は黙ってるつもりだったけどやっぱりこの2人には私の本当のことを聞いてもらおう。今まで誰にも話してないが、この2人には聞いてもらいたい。

「アネットさん、ドミニクさん。私、正直どうしたらいいかわからない。だから2人にも相談に乗ってほしい。それには2人に私の地球にいた頃の話も聞いてもらわなきゃなんだけど、長くなっちゃう

し聞いててて気分のいいものじゃない。それでも聞いてくれる?」

2人は直ぐに

「もちろん。」

と声を合わせていった。

私はそれを聞いて一呼吸置き話し始めた。

私の重い、許されない罪について。

6ページ(後書き)

再びシリアス風味・・・

早くコメディーにしたいのに次もシリアス確定・・・・・・・・・・
ああ、愛しのコメディーよ(笑)

すみませんがもう少しだけお付き合いください。
次回は翔子の地球にいた頃の話です。

私の家はいまどき珍しく昔、華族だった家みたいでしきたりとかが
いっぱいあった。

私はそんな家の本家の次女。まあ本家の娘といつても私はお父さん
と浮気相手の人の間にできた子だった。要するに妾の子だ。なので
お母さんには好かれていなかった。

でも私にはとつても大好きな兄弟がいた。お兄ちゃんとお姉ちゃん
が1人ずつ、双子の歳の離れた弟が2人。4人とも妾の子の私にも
普通の兄弟のように接してくれていてとても仲がよかった。

華族、といつてもお家継ぐのはお兄ちゃんだったので私は普通の人
と変わらない生活を送っていた。

お兄ちゃんもお姉ちゃんもとっても優しいし弟たちはかわいいし、
お母さんには恨まれてたけど幸せだったと思う。

でもそれも全て私が壊した。

高校生になった年、私は誰かからかストーカー被害を受けていた。
初めの頃は視線を感じるなー位だったけどそのうち無言電話がかか
って来たり物が盗まれたりした。

はじめのうちは我慢できたけどそのうち怖くなって一番頼れる大好
きだったおにいちゃんとお姉ちゃんに相談した。2人は薄々私の周
りの様子が変わったと思ってたらしくちょうど聞こうと思ってたらしい。
タイミングよかったねー！とか言い合って笑った。

次の日からお兄ちゃんが学校に迎えに来てくれるようになった。私は大好きなお兄ちゃんが迎えに来てくれるのが嬉しくていつもはしゃいでた気がする。

スニーカーの事も考えないで。

お兄ちゃんが迎えに来てくれるようになって2週間が経ったころスニーカー被害はだいぶ無くなってお姉ちゃんと2人で喜んだ。

被害が無くなってから1週間後。

その日はたまたまお兄ちゃんが忙しくて迎えにこれなかった日だ。お兄ちゃんから「迎え行けなくてごめん。」ってメールが来ていてちよっぴり残念だなんて思ったのを覚えている。

だから友達を誘って近所に新しくできたクレープ屋さんに寄り道してから帰った。

友達とクレープの感想を言いながら道の途中で分かれて門限に遅刻しそうだったから小走りで家に向かっていった。何とか間に合いそうと思いながら道の角を曲がった。

そこで目にしたのは猛火に包まれた我が家だった。

理解ができなかった。

ナニアレ？何で燃えてるの？何があったの？

呆然としてそう考えていたら近くから声が聞こえた。

「この火事って放火らしいわよ。」

「まあ、物騒ね……。そういえばまだお兄さんとお姉さんは救出

されて無いんでしょう？大丈夫なのかしら……。」

お兄ちゃんとおねえちゃんが？

その言葉を理解した瞬間私は駆け出した。

消防員の人が止まれと叫んでいるけど無視して燃えている我が家に入り込んだ。

中はすごい煙だった。家も今にも崩れそうなほど燃えていたが私は中に入っていた。

無我夢中で突き進んでいったら居間にお兄ちゃんとお姉ちゃんがいた。

2人は倒れていた。

もう動けない姿となっていた。

その2人を見た瞬間私は気を失った。

次に目が覚めたのは病院だった。

生きてたんだと思い、呆然としていたら病室にお母さんが入ってきた。

そして目が覚めた私を見て近くによつて来て私の頬を思い切り叩いた。パァンと乾いた音が響いた。

私がつくりして何もいえないでいたら母は話し出した。

「貴方のせいよ……貴方のせいで孝之と桜子が……！」

気づいたらまたベッドで寝ていた。

それから2週間後私は退院した。病院にいるときも退院してからも私が泣いたのは病室で兄と姉が死んだことを聞かされたときのみだ。それ以降私は泣けなかった。

そして退院してから1週間ほどで本家を出て一人暮らしをはじめた。家を出るとき誰も私に何も言わなかった。でも私も悲しくも無かった。笑って家を出た。

半年たつてようやく一人暮らしになれた頃、いきなりこの世界に来たのだ。

「っていう感じだったんです私の地球の頃の生活。なので別にあつちの世界に急いで戻りたいわけじゃなかったんですよね。だからゆつくり戻る方法を探していたんです。ですけど今日、戻れないってハッキリ言われたせいで思わず泣いてしまいました。びっくりしちやっただんで・・・」

そういつて笑って話を締めくくった。

黙って話を聞いていた2人は私を見て悲しそうな顔をしていた。

「あーもう、シーのバツカ野郎！！泣きたかったら泣けばいいんだ。無理して笑う必要なんてねーんだよっ。」
ドミニクさんが怒りながらいう。

泣きたい？

そんなことは無い。私は泣きたくなんて無いのだ。

「私、別に泣きたくないですよ？大丈夫です。」
二ヘツと笑って言うとドミニクさんはさらに怒りながら言った。

「なあーにが泣きたくないだよ！そんなつらそうな顔しやがって。あのなあ、どうせお前のことだから自分が殺したくせに泣くなんてしちゃだめだっと思ってるんだろうけど、お前は一個も悪くねえからな。悪いのは放火したやつだ。お前は悪くない。」

「ドミニクの言うとおりシーは悪くないんだよ。だから泣いてもいいんだ。それにここは異世界だから誰も何も言わない。お前の家の人はいない。思う存分泣きなさい。シーお前は悪くないんだよ。」

お前は悪くない。

ずっと誰かに言ってもらいたかった。

家の人達は私について何も言わなかった。けど態度に表れていた。跡継ぎを殺した妾の子って。

みんな何も言わなかったけど目線で、態度で私を責めていた。いっそ正面から罵ってほしかった。でも誰もなにもしなかった。その視線がいやで家を出たんだ。

嘘でもよかったから言ってほしかったお前は悪くないって。

そうして泣かせてほしかった。

でも誰もそうさせてくれなかったのに。

まったく違う世界で出会った人達によって私は泣くことを許された。

ああ、もうやっぱりこの2人は私を泣かせたいのね。
私は本日2度目の大泣きをした。

7ページ(後書き)

す、進まない。物語が進まないです………

話を聞かない騎士達もう一回出したいんですが；

「はー・・・こんなに泣いたの生まれてはじめてです。」

「ははは。まあそうだろう。しょっちゅうこんなに泣いてちゃ身が持たないだろ。」

そういつて3人で笑いあう。

今、2度目の大泣きをしてようやく落ち着いたところだ。

もう体の水分がなさそうなくらい泣いたおかげで気分すっきり爽快だ。

「さて、それでシーあんだどうするんだい？結論出さないとまたあの騎士達が来ちゃうよ。」

笑ってたアネットさんが表情を引き締めて言う。

「うん。そのことなんだけど泣きながら自分で考えてみたんだ。」

「・・・泣きながら考えてたのか・・・。。。。器用だな・・・」

ドミニクさんが少し呆れながらいった。

むう。しょうがないじゃないか時間無いんだし。と思うが平和的に

話を進めるためにここは私が大人になろう。

「お褒めいただきどうもありがとうございますっ！」

語尾が強くなったのは不可抗力だ。

「それでわたしやっぱり、王都に行こうと思います。どうせ断つても国王の勅命とかが来たら断れせんもんね……。それなら最初から行くって表明して有利な立場で行こうかと思って。まあ最後まで私は巫女姫じゃないって否定はしますけど。」

本当は王都なんか行きたくない。ここアネット食堂で働いていたい。でももし王様が実力行使で私を呼ぼうとした時にアネットさん達に迷惑がかかるかもしれない。そんなのは嫌だ。

それなら最初から行くって言うておいてある程度融通が利くようにしたほうがいい。どうやらあの話を聞かない騎士は私（巫女姫のことだけど）を崇拜している感じがあったのである程度の我儘や命令なら聞きそうだし。

そう伝えたらドミニクさんが

「お前ってかわいい顔してだいぶ腹黒いよな……………」

と少し引いた顔で言った。

失礼な人だなー。でもまあ私は大人だから流してあげよう。

「腹黒いんじゃないかって計画的といってください。それに使えるものは使ったほうがいいんですよ。」

「はは。そういえば私がシーにそう教えたんだっけか。」

「そっぴゃアネットさんの教えだった気もする。」

「あーそっぴゃアアネットさんなら教わった気もしますね。えっと、それで王都に行くことなんですけど今すぐには行きません。6、7日後に出発してもらいます。これぐらいは譲渡してもらいます。つーかさせます。」

「ああ、そっぴゃアだね。そっぴゃアしたほうがいい。それならちゃんと町の人にも挨拶できるしね。」

「騎士団にも挨拶に来てやってくれ。ロウフとかが寂しがるからな。」

「うん。そっぴゃアするね。他にしたほうがいい事あったっけ？」

「うーん荷造りはほとんど荷物ないから2刻もあれば終わるしな。」

「そっぴゃアだねえ、店用に二ホンシヨクの作り方を教えてくれないかい？あとアドルフにも連絡するといい。シーに会えるようになったらきつとあの子も喜ぶよ。」

「了解です！そっぴゃアか王都なんて良い事なさそっぴゃアだと思っただけけどアドルフ君がいるんだね。ちょっとだけ楽しみになってきたよ。」

「久しぶりに生アドルフ君に会えるのはちょっと嬉しい。まあそれを差し引いても王都行きは憂鬱だけだっけな！」

「そっぴゃアだな。あいつ元気にしてるか見てきてくれ。」

「じゃあとりあえず大体の方針は決まったからあとはまた明日というか今日になっちゃったけど考えよう。とりあえず今は寝て体を休めた方がいいよ。」

アネットさんに言われてもう次の日になっていたことに気がつく。うわー早寝な2人には悪いことをしてしまった……。

「うわっ！もう日またいでたんだね……。2人ともごめんなさい遅くまで。」

「いいんだよそんなの。って言ってもさすがにもう眠いな。じゃあまた後で話し合おう。俺明日休みだったから家にいれるし。」

「うん。おやすみ！色々ありがとう。」

そう言ってとりあえずは寝ることにしました。

でもこんな不安定な状況で眠れないかもー！
なーんていう悩みはベッドに入った瞬間に消えました。

私は2分くらいは睡魔と闘ったがあっけなく負け眠りに落ちた。
神経図太いな私……。

8ページ（後書き）

ちよつと明るくなりましたかね？

主人公は割とあっさりとした性格なので決断も早いです。

王都行きも結構あっさり決めちゃいました。

アネットさんとドミニクさんもそのことを分かっていたし、王の勅命とか来たらだめなことも知っていたのでこちらも結構あっさりです。

でも3人とも本当はシーはアネット食堂で働いているのが一番だと思ってます。

習慣というのはなかなか消えないらしい。

夜更かしたので朝起きれないかとも思っていたが眠気より毎朝6刻に起きる習慣の勝利のようだ。
きつちり6刻に目が覚めた。

まあ目が覚めても眠いわーやっぱり。早寝早起が一番だわーなどと考えつつ下に降りる。

「あ、アネットさんおはよう。夜遅かったのに早いですねー……。」

「おはよう。シーも早いじゃないか。ドミニクのアホは遅いけどね。まったく……。」

やっぱりドミニクさんいないのか。彼はいつも遅刻ぎりぎりに起きて騎士団本部に走っていつている。パンくわえながら行った時は思わずこの少女マンガだ！ってつつこんでしまった。

「あはは。まあ昨日は遅かったですから……。朝食の準備手伝いますねー。」

そういいながらキッチンに入る。

そうして2人で朝ごはんを作っていたらドミニクさんが下りてきた。

「ふあー……。おはよー……。2人とも早いなー……。」

ものすごいあくびしながら間延びした声でおはようといわれても全然おはような感じがしないもんだな……。

「おはようございますドミニクさん。ご飯今できましたんで食べましょう！」

3人で食卓につく。

「いただきます。」

この世界には食事の時のあいさつ いただきます や ごちそうさま が無かった。私は言わないときがすまない性格だったので毎回言っていたら意味を聞かれてそれ以来みんなで言うようになったのだ。

うん、いい習慣だ。

「あ、ドミニクさん騎士団やすませちゃったみたいですね。貴重なおやすみなのに……。」

「ん？あー大丈夫だ。騎士団長が特別に休みくれたからむしろ俺的にはラッキーだったからさ。」

へー休みくれるなんてすごいなー。やっぱり王城の騎士達が来たからかね？

「そうだったんですか。ならよかったです。それあの騎士達はいつ来るんですか？」

「お昼ご飯に招待したよ。食事しながらのほうがスムーズに進むか

らね会話は。」

お昼かー・・・今7刻だからあと5時間。うむ。とりあえずアレしとくかな。

「ドミニクさん。魔力の封印解いたときたいんですがお願いしてもいいですか？」

「あー・・・そうだな。はずしといたほうがいいかもな。よし！じやあ飯食い終わったらやるか！」

ということとで私とドミニクさん2人は町のはずれにある小さな丘に
来ていた。

「んじゃもう早速はじめるぞ。」

ドミニクさんがそう言ってポケットから魔方陣の書いてある紙を取り出す。

その紙を地面に置いて何か呪文を唱える。

ドミニクさんの呪文は私は聞き取ることができない。なぜだか分からないがこちらの世界の文字や言葉は完璧に分かるのに魔術の呪文だけはどうしても理解ができないのだ。

まあ私は呪文なし&動作なしでできるけどねー。いやーチートですわ。

でも難しい魔術のときは動作をつけてきとうにそのイメージに合う言葉を日本語で言っている。そうするとイメージしやすいので魔

術を使いやすくなるのだ。

魔術は基本、想像の力だ。考えたことを具現化するために魔力を消費する。もちろん属性があつて得意不得意があつたりもするが基本はやっぱり想像だ。その点私は漫画とか映画とかゲームとかで想像がある程度できているので楽だったりする。考える力《妄想力》もすごいしねっ!!

ちなみに属性は6種類あつて『風』、『地』、『水』、『炎』、『光』、『闇』である。

普通の人は基本2種類だが稀に3種類使える人が生まれるらしい。あと光と闇属性は貴重で使える人はほとんどいないとか・・・

あ、私は全属性ですよー。うん。チート万歳!

そんなことを考えていたらドミニクさんが呪文を唱え終わった。彼の目の前には先ほどの紙に書かれていた魔方陣が宙に浮かんでいた。

「よし! シー急いで魔方陣の中入れ!」

私は急ぎ魔方陣の中に入る。

すると魔方陣が発光し始め私の体を包み込んだ。

次の瞬間からだの中に熱い何かが入り込むような感覚におちいる。

「ーっ!!!!!!」

声にできない衝撃が私を襲うが歯を食いしばって何とか耐える。

1分くらいだろうか、じっとして耐えていると魔方陣は急激に光を

失い消えていった。

私は思わず地面に座り込む。
するとドミニクさんが心配そうにこちらを覗き込む。

「大丈夫か？いきなり大量の魔力が入り込んだから体が驚いている
んだろう。立てるか？」

そっぴいなながら手を差し伸べてきた。

「んーなんとか大丈夫そうです……。でもすごい衝撃ですね。
え。びつくりしました。」

手を取り立ち上がる。

「ははっ。まあ普通の人じゃ今の量の魔力が体に流れ込んだら死ぬ
だろうな。でもシーはその魔力を普通に操れるんだからすごいよな。」

普通の人々が許容量を越す魔力を体に入れると死んでしまうこともあるらしい。

魔術は便利だけど危険でもあるのだ。

「まあ異世界人ですからー。さて、もう戻りますかね。アネットさ
んとも作戦会議しなきゃだし！」

「作戦って普通の言葉だが母さんとお前がいうとなんだか冷や汗が
出るんだが……。」

まあなんて失礼な人だろう。作戦は作戦なのにー。

多少はせこい事もするけど基本は正々堂々となのにー。

そういつたらドミニクさんは遠くを見ながらフッ・・・と笑って歩き出した。

私は慌てて後を追った。

9 ページ（後書き）

この世界の人は基本魔力もちです。

多いか少ないかの問題ですね。ちなみにドミニクさんは中の上くらいですかね？

アネットさんは少なめで下の上くらい。

シーはもうありえないくらいです・・・（笑）

12刻の10分前

私たち3人は食事の支度が整ったテーブルに座っていた。

心なしかみんな緊張した面持ちである。まあ今から決戦ですからね。緊張してますよ私も。

ちよつと嘘ついたりもするかもだからポーカーフェイスが苦手な私はビクビクです。でもまあ嘘も方便つて言うから、うん。私はことわざに従ったまでだ！！という言い訳をここにしておう。

そして12刻きっかり。食堂のドアが開いた。

あ、ちなみに今日は食堂は臨時休業です。申し訳ないことをしたなあ……。

「昼食のお誘いありがとうございます。」

恭しく2人が私達に礼をする。うおー……この辺の優雅さがさすが王城で働いてるだけあるなって感じなんだよな。

「いえお気になさらず。さ、お掛けくださいな。」

アネットさんが騎士達に席を勧める。

2人はもう一度軽くお辞儀をしてから席に着いた。

さて、早速いきますかね。戦（戦じゃないけど）は先手必勝！

「あの……昨夜は大変失礼しました。色々と衝撃的なことを聞いたため取り乱してしまって……」。申し訳ありません。」
立ち上がって深くお辞儀をして謝る。

すると話を聞かない騎士のアレンさんが慌てながら言った。

「そんな、頭をおあげください！いきなり押しかけて色々と話した私達に非があるのです。巫女姫様は悪くありません！」

フフ、やっぱりな。アレンさんは巫女姫崇拝者だったな。よし計画通りだぜしめしめ……。

といったような心の声は顔に出さず

「いえそんな……。私が悪いのです。でも許してくださいるなんてお心が広いんですね。」

と微笑みながら言ってみる。

案の定アレンさんは頬を赤らめて嬉しそうにしていた。

「さあさあシー、その辺にして後は食事しながらにしてください。せっかく作ったのに冷めてしまうよ。」

その一言でみんなが食事を始める。

「……いただきます。」

3人で声を合わせて言うのと騎士達が不思議そうな顔をしてこっちを見ている。あー説明したほうがいいかな？と思いつ騎士達にもいただきますの意味を言うのと敬語が苦手な騎士、レイさんがしきりに感心していた。正直そんなにほめられると私が考えたわけでもないので若干後ろめたい。

でもこのおかげでレイさんも少しは私達に気を許したかな？だとしたら嬉しい誤算である。

料理の感想を言い合いながらみんなで食事をする。その間騎士達は巫女姫について何も言っていないかった。昨日のこともあって遠慮してるのだろうか？まあちよっどいいや。

みんなのお皿がほとんど空になった頃に私は切り出した。

「えっと、それで昨日私のせいで途中になってしまった話ですが・・・」

そついうと騎士2人が食事の手を止めこちらをじつと見る。

見られたことで私のチキンハートがドクドクいはじめた。震えそうになる声を抑えてハッキリと言う。ここから本当の勝負だから始めでこける訳にはいかない。大丈夫！私は女優よ！！

「私王都に、城に行きます。」

「巫女姫様、本当ですか！？ありがとうございます！」

アレンさんが即座に反応する。反射神経パネエ・・・と思いつつ返事をする。

「ええ。ですが、条件があります。こちらを守っていただかないと私は行きません。」

条件という言葉に静かに聞いていたレイさんがピクリと反応する。

「条件とは・・・？」

「1つは、ここフェーンの周りを覆っている古の森いにしえの開発をやめる事です。この森は多大な魔力を持った木々が育っている。なのに開発で木を切っているでしょう？そのせいで魔力が漏れてしまって町

の人々は体調を壊してしまっています。それに森を開発しては魔物が町に来てしまいやっぱり危なくなるのです。なので中止してもらいたい。」

このフェーンの町は東側が森で覆われている。その森の開発が半年前から始まったのだ。そのおかげで魔物は来るわ、魔力は漏れるわで一時大変な騒ぎになったのだ。まあ今は私が森に接している東側を結界で覆っているから魔力は流れてこないんだけどね。でも私がいなくなったらさすがに遠くて結界の威力が弱まると思われる。なのでやめてもらうしかないかなーっていうね。実際開発してくれても町の人たちは嬉しくないし。

「2つ目は地方の騎士団にもっと支援をしてください。これはフェーンのみじゃなくて他の町もです。地方の騎士団はかなり苦労してるんです。最近をよく魔物が出るから……」。最後に城に行く出発は10日後にしてください。私にも準備などがあるのです。

この3つを守ってくださるなら私は王都に行きましょう。」

そういうと2人の騎士は考え出した。うんまあ結構無理難題言ってるって自覚はあるから急かさないよ。だってねえ……一介の騎士達に決められるような問題じゃないからねー。

ま、分かってても条件出すけどねー。

腹黒いんじゃないですよ？ただこの位してもらわないとね、行きたくない王都に行くんだから。

「……前の2つの条件は飲みましょう。ですが10日というのはちょっと……。急がねばならないので」

おや、そっちがだめなのね……。開発中止と地方騎士団支援が

駄目かと思つてたけど。
そんなに急いで私を連れて行きたいのか……。でもまあこっちも譲らないけどね。

「申し訳ありませんが10日は譲れません。いきなり行けるようなものではないのです。仕事だつてありますし……。」

食堂はどうにかなくても魔法の便利屋のほうはやりかけの仕事を終えてやめるむねを町中に知らせなきゃならない。

「……………」

「……………」

無言で圧力の掛け合いが始まる。

ハッキリ言っちゃえばめちゃうくちや怖いがここで怯むわけにはいかない。なので私も無言で応戦。

「……………王からはもし、来ないというようなら実力行使でもかまわないといわれています。それでも、ですか？」

1分くらいの沈黙の後にレイさんが声を絞り出した。

え？そんな物騒な感じなわけ？王様よ……。

まあでもこっちとしてはこの展開は大歓迎だ。アレをやれるからね！。

題して『実力差を見せ付けちゃっよ！こっちのほう格上なんだよ大作戦！！！！』

うん。ネーミングセンスについては触れない方向で。

「ふふ、それは誰に向かっていつてるんですか？もしかして私ですか？」

そういつて私は笑う。相手が凍りつくように、冷たく、嘲るように笑う。

笑うのと同時進行で、魔力を大量に放出する。封印解いてリミッタは無いのでどんだけ出して痛くもかゆくも無いです。まあ封印しててもこのくらいは出せたけど。ちなみにアネットさん達には始めから結界張ってます。なので苦しむのは彼らだけ。

騎士2人はなかなか魔力が多めなようで始めは気づいてないようだったが私がちよつと放出量を増やすとすぐに体に変化が現れたようだ。

アレンさんは頭を、レイさんは胸を押さえて苦しがる。

「つな、にをした!？」

レイさんが叫ぶので私は笑みをキープしたまま答える。

「ただ魔力を放出しているだけです。でもまあ私の魔力は純度が濃いらしいしちよつときついかもしれませんね?・・・さて、これで実力差を分かっていただけましたかねえ？」

わざと間延びした口調で言う。これだけでイライラって増すよね！2人は「クツ!」とかなんとか言っつて黙り込んだ。さすが王城に仕えている騎士だわ。勝てないと思った相手には逆らわないところがすごいわね!。この辺の騎士だったら普通に襲いかかってきそうなもの。

「分かっていただけたようでよかったです。んゝ・・・では貴方達の熱意に免じて少し譲歩して7日後に出発にしましょう。今日から7日後の朝に迎えに来てください。」

そういつて私は彼らに転移の魔法をかける。もちろん彼らの荷物にもね。

アレンさんとレイさんは自分の体がわずかに発光しているのに驚きを隠せないでいる。まあいきなり自分の体が光ったら誰でもびっくりするわ。

「転移の魔法です。害はありませんし、絶対に安全に飛ばすので安心してくださいね？飛ばすのは古の森の入り口にします。実際に開発の現場見たほうがいいかもですもんね。ではさよ～ならあ～」
笑顔で言い終えると同時に飛ばす。

彼らがいなくなり（飛ばしたともいう）私は終わったぜ・・・と安堵のため息をつく。

そしてアネットさん達に

「無事終わりましたね！！」

といいながら笑顔で振り返ったらドミニクさんに引きつった顔で

「お前・・・怖すぎるわっ！！！！！！」

と突っ込まれました。がんばったのにつ！！！！

10ページ(後書き)

シーは実は腹黒くて計算高いです。でもビビリw
ポーカーフェイス苦手とか言ってるけど実際はかなり笑顔が怖かつ
たみたいです(ドミニク談)

「じゃあ行つてきますね！」

笑顔で皆の方を見て言う。するとこっちは笑つてるのに町みんな（主に騎士団の人たち）が泣き出した。泣きたいのはこっちじゃよ！

「シイイイイイ、本当に行つちゃうのか？」

ロウフが涙目で言う。女の子じゃなくて町を守る騎士団が泣いちゃつていいの・・・と考えていたが話しかけられて意識を戻す。

「うん。皆と離れるのは寂しいけど行かなきゃだから。」

だから泣かないで、というとさらに皆泣き出しました。え、なんか私が泣かしたみたいな感じになつちゃってるよ・・・。とゆーか騎士団の泣きっぷりに皆引いてるよ・・・。

「もうっ泣かないで下さいよー。それにわたし転移の魔法で簡単にこっち来れますから。」

そついうと町民みんなの動きがピクリと止まる。（アネットさんとドミニクさんは動いてるけど）

「え？シーって帰つてこれるの？もうこの町には二度と戻つて来れないとかじゃないの？」

「え？そんな話になつてるの？普通に帰ってくるけど？転移の魔法

なら一瞬でこれるけど……。」

そういつたら皆が口々に「あの噂は嘘だったのか!」といいながら
ロウフをしばきはじめた。

噂?聞き捨てならない言葉が聞こえたような……………。

「ロウフくん、噂って何のことかなあ?」

しばかれているロウフに笑顔で問いかける。なんでもドミニクさん
いわく怒っているお前の笑顔は普通に怒られるのより100倍怖い
らしい。失礼だわーと思っていたがこのロウフの怯えようからいつ
て事実っぽい。悲しいかな……………。

「い、いやね、なんかさ王城から騎士が来てたし、その騎士たちが
跪いてたからさシーは実はめちやくちゃ偉い貴族なんだけど貴族の
暮らしが嫌になってこの国のはずれの町に逃げてきたんだけどとう
とう居場所がばれて連れ戻される、とかそんな感じかなーって仲間
と話してたんだよ。そしたらその話がどこから漏れてさ、いや別
に大声で話したわけでは無いんだぜ?でもほら場所がバーだったか
らさ聞こえちゃったみたいでさ。止めようとしてもすでに時遅くて
さ。否定しても真実みたいになるかとおも、グハア!」

長いので一発殴って沈めときました。長かったからだよ?決してう
ざかったからじゃないよ?その一発に今までの恨み込めたとか決し
てないからね?

「みんな、その話であってんの王都に行くことだけだから。普通に
戻ってくるから。もう……………ロウフめ。余計なことしやがって。ま
あとにかく一生の別れではないからね……………さて!そろそ
ろ行くね。騎士さん達も待ちくたびれてるし。」

この会話の中アレンさんとレイさんは微動だにせず立っていました。偉いっ！さすが一番隊の騎士！！姿勢も無駄にいいよ！！

「ああ、いつてらっしゃい。気をつけるんだよ。」

「おういつて来い。いつでも戻ってこいよ。」

アネットさんとドミニクさんが笑顔で送り出してくれる。それだけでだいぶ気持ちが軽くなった。

「うん！いつてきますー！！」

もちろんわたしも最高の笑顔で答えて騎士達のほうへ行く。

「お待たせしました。では行きましようか！」

そういうと2人は町の方に一度お辞儀をして黙ってわたしの前を歩く。

わたしもその後ろを黙って歩く。皆が口々に何か言ってるけど後ろは振り返りませんよ。未練ダラダラなのにさらにここにいたくなくなっちゃうから。涙ぐんできた目を押さえて黙々と進む。

黙って5分ほど歩いたところに馬車がありました。さらに騎士と思われる人影が7人ほど。

え？な、何で人？まさかこの7人の人たちってずっとここで待機してたわけ？7日間も、この寒空の下にテントを張って？雨の日もあつたのに？

さっきまであつた感傷的な雰囲気が一気に吹き飛びました。変わりに冷や汗がこんにちはだよ！

「あ、あのもしかして彼らはずっとここで待機してたんですか？」
恐る恐る聞いてみた。否定しろ、否定しろと頭で念じながら。

「はい。そうですよ。ちなみに彼らも一番隊の隊員です。」
アレンさんが平然と答えてくれました。

「うおーやっぱりここで待機か！しかもその寒そうなテントですか。
悪いことしちゃったよー。」

「うーむ、ここはやっぱり日本人らしく」

「すみませーんんんんん！！！！」

謝りました。大声で。そしたら騎士×9がこっちを一齐に見た。あらまあ息の合った動き。

そしてレイさんが不思議そうに口を開く。

「えっと、なぜ謝っておられるのですか？なにかありましたか？」

「いえ、そのまさかレイさんとアレンさん以外に騎士の方がいられると思っただけ。2人なら町の宿に普通に泊まれるだろうと思っただので7日とか言ったんですけど……。本当すみません！テントで7日って大変だったですよね……。雨の日もあつたし。もうほんとすみません。」

一気に喋り終えて下げていた頭を上げるとみんな鳩が豆鉄砲を食らったような顔してました。こんな顔始めて見たわー。実際にできるのね人間って。というか、何にびっくりしてるのこの人たち。

「えっとつまり巫女様はあの者達が7日間もテントで過ごしていたのが申し訳なく思っている、と言うことですか？」

通常の顔に戻ったアレンさんが聞いてきました。え、もちろんそう

だけど。むしろそれ以外に解釈の方法あんの今の言葉、と思いうな
ずくとアレンさんが倒れこみました。

「な、なんと慈悲深いお言葉……。巫女姫様なんてお優しい
のでしょう。ご安心ください！この一番隊にいるものたちは皆頑丈
さがとりえなので問題ありません！巫女姫様がお心を痛める必要な
どどこにもございません。」

倒れたんじゃないかと心酔してたみたいです。紛らわしいわっアホ！心
配しちゃっただろうが！

てか散々な言われようだけどいいのが一番隊の隊員よ、と思い周囲
を見れば皆アレンさんみたいになってました。（レイさんともう1
人の隊員さんは除く）えー……何この人たち。

こんなんで大丈夫なのか？王都に向かう旅は……………

一気に不安感が増してきました。

11ページ(後書き)

ようやく出発です。ここまで来るの長かったです……。早
く城行きたいですわー。

12ページ(前書き)

進みません物語が……。それもこれも騎士達のせいだ！()
()

ガツタンゴットン ガツタンゴットン

規則正しい音を立てながら馬車が進む。わたしは馬車に乗るのははじめてだったので始めはウキウキしてたけど嫌気がさしてましたよ。お尻痛い。めっちゃ痛い。誰かクツションをくれ！今なら1万円でも買っ！！

「大丈夫ですか巫女姫様？先ほどから落ち着かないようですが。」
アレンさん、鋭いよ。見なかったことにしてよねー。お尻が痛いんですとか言いにくいわ！

「いえ、馬車にはじめて乗ったものですから落ち着かなくて・・・。」

「初めて？今までは何で移動していたんですか？」
ルーカスと名乗った騎士が話しかけてきた。彼はあの馬車の場所で待機していた騎士の一人で馬車に乗る権利を勝ち取った幸運な人らしい。なのでさっきからずっとニコニコしている。

「移動ですか？私はほとんど転移魔法です。楽なので。」

「あー転移の魔法ですかー。そりゃ馬車なんて必要ないですよね。ん？じゃあ王都まで転移はできないんですか？」

「転移の魔法は一回行ったところじゃなきゃ行けないですよね。なので王都はだめです。だいたい初めての場所は馬でそこまで一回行って帰りは転移で帰ってくるって感じですね。」

へえ〜と興味深そうに聞いてくれている。ルーカスさんはアレンさんみたいに崇拜しているわけでもないし他の騎士さん達みたいに畏

まりすぎてないから話しやすい。そして彼、聞き上手なのだ。思わずいっぱい話したくなってしまふ。馬車の中では彼と時々アレンさんを交えてずっとお話してました。

馬車に乗ってからもう8時間は経っただろうか。だいぶ外の景色も変わってきた。さっきまでは森っぽかったけど今は草原って感じ。開放感あっていいわ。ちょうど夕日も沈んできてとってても綺麗だ。あー写真撮りたいな。カメラ欲しい。

でもだいぶ暗くなってきたから今日は野宿かしら？と思っていたら馬車が止まった。うむ、やっぱり車と違って止まるのにも衝撃半端ないね。頭を打ち付けそうだったよ！

止まってからしばらくすると扉が開いてレイさんがこちらを伺うように見た。

「誠に申し訳ありませんが本日はこちらで野宿でよろしいでしょうか？」

いいもなにも私はキャンプとか結構好きなので大歓迎である。宿も素敵だけど野宿も結構いいものだ。

「もちろん大丈夫です！むしろ好きですこーういー感じ。」

というレイさんはお礼を言って手を差し伸べてきた。

ええ、そうです。トリップ小説の王道の馬車から降りるときのエスコートです。ぶつちやけ、いらねええええ！けどやるしかねえええええええ！って感じになりますよこれ。

渋々（と思っているが顔には出さない）手を取って外に出た。

「んー！ー！ー！」
降りて思わず声を上げながら伸びをするとルーカスさんに笑われま
した。

「そうとう乗りなれてないんですね。」

「あはは・・・。お恥ずかしい限りで。」

そういつて談笑する。むう・・・ルーカスさんって私より年上なの
に私に敬語なんだよなー。やっぱり巫女姫だからかね？でもできれ
ば皆と普通に話したいから敬語とかやめて欲しいのう。夕食の時話
してみようかな。

そんなことを考えつつ周りを見渡すと4人ほどの騎士がテントらし
きものを張っていました。

「あつ！ちよつと待つてくださいー！！」

慌てて止めに入る。すると騎士達が不思議そうな顔をしていた。

「何かありましたか？」

「いえあのもしテント張るなら私が結界を作ろうかと思ってまして。
結界の中なら魔物来ませんし気温調整もできるので寒くないですし。
張ってもいいですかね？つか張らせてください。」

結界は便利なのよー！張るときに色々設定すれば温度調整可能だか
らね。快適快適。なので若干強引に言ってみた。

4人の騎士は困ってた様子だったのでレイさんに聞いてみた。彼は
少し悩んだ後に私が大丈夫ならお願いしたいと言ってきたので早速
張ることにしました。

まあ張るっていつてもイメージして少し呪文唱えればいだけだけ
ど。結界は詠唱つきのほうがイメージしやすいので声に出してやっ

ている。

「範囲、私を中心に半径20メートル、対象は私を含む今この場にいる人間10人、効果は魔物から見えなくなる、対象以外は入れなくする、内部温度を24度に保ち続ける、対象以外の人物が結界から10メートル以内に近づいて来たら私に知らせるの4つ。形は半球体。地面も覆う。」
「ブツブツ呟いて指で半球を描く。すると私たちの周りに白っぽい半透明な膜が出来上がる。」

「うしっ！できたー。」
そう呟いていたら騎士達はかなり驚いたみたいで膜を無言で見つめていた。

「この結界は対象者なら触っても大丈夫ですよ。有害じゃないです。ちなみに触るとふにゆふにゆしますよー。」
そういつたらルーカスさんが恐る恐る触れてみている。
「おおっ！本当にふにゆふにゆする！！やべえ気持ちいい。」
そういつて連打し始めた。周りの騎士達も彼に触発されてか触っていた。歓声を上げながら。

結界で小学生並にはしゃぐ騎士って……。
この国の未来が少し不安になった。

12ページ(後書き)

今更ですが は日本語って意味です。

結界は本当は張るのにめちやくちや力使います。それを他の魔法も併用しつつ維持するのは神業です。

結界を張った後はすぐにご飯になった。こちらの世界の人は寝るのが早い。なのでご飯も必然的に早いのだ。

ちなみに今日の夕食は干し肉みたいなのとちょっと固そうなパン、スープと果物っていう豪華なのか質素なのか分からない夕食でした。（果物は結構高価なのです）

「巫女姫様このような粗末なもので申し訳ありません。」

アレンさんは謝ってきたけど結構おいしそうだし旅先で豪華なもの食べようかと思ってないんで別にOKだ。つーかお腹空いてるから今なら何でもおいしく食べれそう。長つたるい謝罪はいいから早く食わせてくれ！。

「いただきます。」

待ちに待った食事スタート。早速パンをかじってみました。・・・
・うん！硬い！！え、フランスパンなんか敵じゃないぜってくらいに硬いんだが・・・。。釘が打てそうだぞ釘が。うーむこういうものなのか？

「巫女姫様、それはこうやってスープにつけて食べるんですよ。」
ルーカスさんが教えてくれました。なるほど。確かに柔らかくなっておいしくなった。

ってルーカスさんで思い出したけど皆さんに敬語やめてもらおうように言おうと思ってたんだ。忘れてたわー！。

「あの皆さん、お願いがあるんですけど・・・って食べたままで

いいですよ！そのまま聞いてください。」

私が話し始めたら皆さん食事の手を止めようとしていた。どんだけ
！。。。。

「それをお願いなんですけどね、私に敬語ではなすのやめてもらえ
ません？私年下だしそんな敬語で話されると困っちゃうんですよ。
あと巫女姫じゃなくシーって呼んで下さい。」

ぶつちやけ私、巫女姫だと思わないしね。私は海野翔子だもん。そ
んな凄い人じゃない。なので敬語で話されてもかしこまっちゃうだ
けだ。それに名前で呼んでほしいっす。

「そんな！巫女姫様とそのような口調など。。。。」

「そんなこと言わずに！全然気にしませんし！！むしろその方が嬉
しいですし」

「いくら巫女姫様の頼みでも無理でございます。親しげにお話しす
るなど。。。。」

「いやだからさあ。。。ああもう！ルーカスさんとレイさん！
！」

こうなったら敬語が苦手そうな2人に矛先向けてやる！
いきなり名前を呼ばれて2人はビクツてしていた。

「貴方達2人は敬語苦手でしょう？ならもう遠慮なく普通の口調で
いいから！！そうして欲しいから。お願いしますっ！！！」

そういつて軽く頭を下げる。ちらりと目で様子を見てみたら2人と

もちよつと困惑した顔をしていた。

沈黙が場に落ちる。き、気まずい……。ああ、せつかくのスー
プが冷めてしまうよ。早く答えてくれ。

「顔を……。いや顔を上げてくれ。シー様。」

レイさんが声を発した。

「っレイさん！ありがとうございます！！ってウギャアア！！！」
感激のあまり勢いよく顔を上げたらその反動で後ろに倒れてしまっ
た。ガゴン！といい音がなって私の後頭部は地面とこんにちはして
しまった。

い、痛い！！やばいタンコブできそう……。涙
目になっていたらクツクツと笑い声が聞こえた。

「クク、シー様面白すぎる。普通そんな勢いで顔上げないだろ。」
笑っていたのはルーカスでした。うん敬語じゃなくていいって言う
たけどこんな笑わなくてもいいじゃないか！恥ずかしいわ！！

「ちよつ！ルーカスさん笑いすぎです！！本当痛かったんだから。
もうっ……。でもありがとうございます。」
そういつて微笑んでいたら

「レイ！ルーカス！！貴様らそのような態度でいいと思っているの
か！！！！！」
と怒声が……………。

アレンさん、私がお願いしてるからね。むしろそれが嬉しいのになー。

どうやら彼は話を通じない人らしい。それに他の騎士達も1人を除いてアレンさん派らしい。非難するような目線を彼らに向けている。ありやりや……。これはまた予想外にめんどくさい旅になりそうだな。

「アレンさん、私がお願いしたんです。彼らに悪いところなんてどこもありません。皆さんも今すぐは無理かもですけどいつでも敬語やめていいのです。さ、スープが冷めちゃうんで食事再開しましょう！」

そういつて干し肉に噛り付いた。うん結構美味である。噛めば噛むほど味が出るって感じ。

アレンさんは不満そうだったけど食事を再開していた。

私はスープを飲みながら考える。

今のでこの中では誰を信用するかが決まった。

もちろんレイさんとルーカスさんともう一人、レイさんの部下っぽい人だ。この彼はさつきからずつと何も発していない。でも多分信用できると思う。レイさんの部下だしね。私を信仰してる感じも面白い。

他の騎士達はアレンさんの部下っぽい。彼らはいい人だと思うけど信用はしない。だって私個人を見ていないから。

彼らは一回も私を名前で呼んでないし目を見て話してもくれない。 ”巫女姫” にしか興味がないみたいだ。そんな人を信用するほど私は素直じゃない。

9人中3人か・・・少ないけどまあ良いほうだろう。味方が誰もいないよりは。

とりあえずは信用していないほうのアレンさん達から情報を集めよう。きつと彼らはペラペラ喋ってくれるだろう。でもってその後、レイさん達から聞いて2つを照らし合わせて真実を探すとしますかね。

そこまで考えて私はぐいっとスープを飲み干した。

13ページ（後書き）

シーはスープを飲み干しちゃった後に気づきます。重大な事実に・・。

「まだパン残ってたああああ!!」

その後、結局笑っているルーカスにスープ分けてもらって食べ終わります。

「ククク、さつき教えたばかりなのに・・・。なんで飲み干すんだよ。やべえ面白い。」

シーは彼のツボみたいです。多分これから先ことあるごとに笑われます。

シー、ドンマイ！強く生きろっ！

「王都についてですか？」

「ええ。王都について教えてほしいのだけど駄目かしら？」

清々しい朝日を浴びている馬車の中で私は首をかしげて聞く。昨日決意したように早速情報を集めてみようと思います。まあ最初は今から行くところの情報を仕入れることにした。

ちなみに今聞いているのは今日の馬車の担当のニコラスさんです。彼はアレンさん派の人。

昨日寝る前に考えたんだがアレンさん派の人たちは私に夢を抱いているみたいだったので私はいつそ猫をかぶってみることにした。巫女姫信仰派の人の前では素の私は出さずに巫女姫を演じるのだ。実際私は演技とか苦手だからあんまりやりたくないが事を円滑に運ぶため我慢します……。ああ……。ポーカーフェイス難しいよ。ちなみに演じるのは「ちよつと天然だけど聡明な控えめのかわいらしい女性」の予定だ。口調も変えてみているが難しいわー。

「もちろん大丈夫でございます。私わたくしにお教おええできることならばなんでもお教おええいたします。」

ニコラスさんが爽やかな笑顔で言ってくれる。い、イケメンめ！その笑顔は破壊力が……。本当何故だか知らないがこの国は美形が多い。まったく日本人が生きにくい世界だ。

その後も続くニコラスさんのなつがーいお話に適当な相槌を打ちつつ必要なところだけまとめるところになった。

王都の名前はオルインピアダといいこの国一番の面積を誇っている。(よって大陸一でかい都市) また建物もフェーンなんかよりは進んでいて魔法で動かすエレベーターとか付いてたりするみたい。魔法もだいたい馴染んでいて魔法学校とかあるらしい。・・・ひげの長い先生とかまるメガネの額に傷のある少年とかを一瞬想像してもしようがないよね？

さらに王都の真ん中には大きなお城。そこが私たちの旅の終着点である。ニコラスさんはやたらとこの城のすごさについて語っていた。勢い半端なかつたよ。乗り出してきていたよ。(私とニコラスさん向かい合わせで座ってます) なんでも城の周りは結界が張ってあり城内で許可の無いものは簡単には魔法を使えなくなるみたい。まあ私は結界書き換えられるから問題ないけどね！。チートですけど何か？

こんなもんしか聞き出せなかったがまあとりあえず必要最低限の情報には手に入れた。本当は城の警備状況とかについても聞きたかったけど『ちよつと天然だけど聡明な控えめのかわいらしい女性』がそんなこと聞かなそうだもんね。しかたない、この辺はもうちよつと親しくなっただけからルーカスに聞こう。

とりあえずほんの少しだけど情報集まったぞ！！

15ページ(前書き)

更新滞ってすみません・・・色々立て込んでまして；
できるだけ更新できるようにがんばります！！

フェーンを出発して早4日。見える景色もだいぶ変わってきた。

とかなんとか言ってみたいが実際景色は草原のまま全然変わらない。ずっと草原。どこまでも草原。遠くを見ても草原。エンドレスに草原。草原しか見えない。

いい加減に目が緑を見ることを拒否し始めてるんだが……

4日も経ったのに今だ次の町にも着かない。どんだけ辺鄙な所にあつたんだフェーンよ……。揺れまくる馬車に慣れ始めちゃったぞ。いったいあと何日でつくんだろう？

疑問に思ったら即質問！今日の馬車担当のルーカスさんに聞いてみる。

「ルーカスさんあと何日ぐらいで王都着くんですか？」

「おー、確かあと4日もすれば着くはずだ。今日は野宿だが明日からは町の宿に泊まれると思うぞー。」

宿！なんて素敵な響きっ！！野宿も好きだけどどうせならベッドで寝たい今日この頃です。枕欲しいよ枕。ところで次の町ってどんな町なんだろう？フェーン以外の町は初めてだな。

「その町ってどんなところなんですか？」

そういうとルーカスさんは苦笑しながら話した。

「あんまり治安がよくないかな。だからシーちゃんは皆から離れんなよ。」

ルーカスさんは2人のところでは名前もちゃん付けで呼んでくれるようになった。嬉しい進歩である。まあ人前ではもう少し固めの敬語&様付けなんだけどね。

「そうなんですかー……。まあベッドに寝ればなんでもいいですわ。」

実際1日寝るだけだからねー。別に治安が悪くてもそんなに関係ないはず。

私がそういうとルーカスさんはまたツボにでも入ったのか笑い始めた。

この人は私の行動が基本的にツボらしい。前にかつたーいパンが残ってるのに一緒に食べる用のスープを飲み干しちゃった時とかひどかった。「笑うな！馬鹿者！」とキレるアレンさんの味方をしたくなるほどだった。まあアレンさんのフォローも身に刺さったけどね！

とにかく困った人だが今のところ最も信頼している人でもある。一緒にいて楽しだし情報も的確なものをくれる。が、全ては話さないあたりがね……。絶対こいつ腹黒いと思う。

「ルーカスさんいい加減笑うのやめてくれませんか？それで話思いつきり変えますけど今日も国の仕組みについて教えてください。」

「はいはい。まったくシーちゃんは勉強熱心ですねー。それで前回回は神殿と王宮の2つに大きな権力があるって所までだったか？」

「はい。その2つが競い合ってるって聞きました。」
ルーカスさんの話によると王宮と神殿はどちらが上に立つか日夜争っているらしい。今のところ神殿が一步リードしてるみたいだがな

んでリードしてるかはルーカスさんにはぐらかされた。この人引くタイミングがうまいんだよなー。困っちゃうぜ。

「そうそう。争ってるんだよねー。それでねその争いのキーポイントが、まさかのシーちゃんなんだよねー。」

「へーそうなんですか。私なんですなー……って私!? どういうことですか?」

意味が分からない。いきなりなんで私の名前が出てくるの? キーポイントって何?

「ククツ、ノリツツコミって……。ちよつ睨まないで! ちゃん」と話すから。まあシーちゃんって言うよりは巫女姫ってことかな。巫女姫は他の騎士が話していたようにこの世界で絶対の力なんだ。

だから巫女姫を手に入れたほうが上になれると思ってるのだろう。今回シーちゃんを半ば無理やり連れてきたのも王様の命令なんだよねー。焦っているんだよまったく……。」「
そういつてルーカスは大きく溜息をついた。

ふーんなるほどね。私が王都に行かなきゃいけない原因はこれか……。……。ふーん。こんな理由で、アネットさん達と引き離されたのかー。

「ふつぎけんなああああああ!!!」
思わず叫びました。

何この理由しようもないわ! 王宮だろうが神殿だろうが知るかよ!!! つーかこの人たちさ巫女姫の話知らないわけ? こんな権力争い見て巫女姫喜ばねーだろーがああああああ!!!!!! 頭おかしいんじゃないのかボケエ!
信じられない! & 許せん!!!

「・・・決めたわ。ええ、もう決めました。」
私はそう呟く。

そうすると私の叫びにびっくりしていたルーカスが聞いてくる。

「何を？」

「王宮の言いなりに神殿の思うようにも動かないわ。こんなくんだりない理由で私を呼んだ事を後悔させてやるんだから！！！」

そういった時の私の顔は本当に怖かったらしい（ルーカス談）

15ページ(後書き)

お気に入り登録件数が100件超えました！

ありがとうございますm)・・(m 本当に嬉しいです

毎日とはいきませんができるだけ更新していきたいと思っています

見張りの騎士以外がみんな寝入った頃、私は寝袋もどきから体を這い出した。

今日は野宿最後の日になるらしいのでいつもよりいっぱいアレ《をやっておこう》と思ったのだ。宿に入ったらできなくなるからね。そんなことを考えつつ私は見張りの騎士達に意識が飛ぶ魔法をかける。意識が飛ぶっていつてもそんな危ないもんじゃないですよ？ちょっと気絶するようなもんです。ちょっと記憶が飛ぶようなもんです。

騎士達がしつかりと意識をなくしたのを確かめてから結界の外に出る。

「寒っ！」

外の気温は王都に近づくにつれて低くなっていつてるみたいだ。寒がりな私には迷惑な話だ。寒い気温に耐えられないので自分の周りに薄く結界を張る。すると一瞬で暖かくなった。

あー魔法って便利だわー。上着いらすだわー。

装備が完璧になったところで私は少し結界から離れて辺りを見回す。5分くらいいきよるきよるしていたらようやく見つけた。うんまあとりあえずはあいつらだな。

おびき寄せるために軽く光を出す。すると気が付いた魔物が結構な勢いでこちらに走ってきた。

そう私が探していたのは魔物である。

私は野宿生活が始まってから（まだ4日しか経ってなけど）魔物狩

りを夜な夜なやっているのだ。

魔物の毛皮や牙などはお金になる。私はあんまりお金を持っていないので稼げるところで稼いでおきたかった。いつ何が起こるかかわからないしね。金は持つていて損は無いだろって言う考えだ。

ドタドタとうるさい足音を立てながら魔物が目の前までやってきた。今回の奴は牛と豚と蛙を合体させたような奇妙な奴だった。数は3体。

魔物にはドラ エみたいに名前が付いていたりしない。『魔物』という一区切りで分けられているだけだ。しいて分けるとすれば「実体のある魔物」と「実体のない魔物」という位だろう。

ちなみに実体がない魔物というのは幽霊みたいな感じだ。攻撃しても当たらないのだ。倒すにはどこかにある核を壊すしかない。こいつは剥ぎ取る素材が無いので私はあんまり好きじゃない。

いやー今回の奴実体あつてよかったよかった。

んじゃちやつちやつと終わらせましよう！！

私は魔力でロープを作るようなイメージをする。すると空中にピンク色の細いロープが出来上がる。

これはシーお手製！魔力ロープ！！ピンクなのは気分です。意味は無いです。

そのロープを使って魔物を縛り上げる。ここでポイントなのは一気に縛り上げることだ。ゆっくりやっていると毛皮とかに傷がつく恐れも出てくるからね。一気にギュッと締め上げる。するとはじめは暴れていた牛豚蛙うしぶたがえる（シー命名）3匹は動かなくなつた。

はい、これで終了です。
そうです。地味ですよ、ええ。素材を傷つけないためには地味なこの方法がいいんです！炎とかやつちゃうと焦げるからね普通に！地味でいいんですよ。

魔力をこめるのをやめてロープを消す。そして今度は腰に刺してあるナイフを取り出して皮などを剥ぎ取る。

最初の頃はグロくてできなかったけど1年いたら慣れました。じゃんじゃん剥いでいきますよ。今なら普通にかわいいウサギちゃんも殺^やれるきがする。

「ふふ〜ん ふんふんふ〜ん」

鼻歌なんて歌いながらどんどん剥いでいきます。下が血の海でも動じない精神が培われています。あんま嬉しくない！

あ、ちなみに魔物でもたいていは血の色は赤です。たまに緑やら紫もいるけどね！そいつらは食べれません。でも血が赤なら普通に食べます。マジで。おいしいですよ？

まあこの世界では食べる人少ないみたいだけどねー。当たり前か・
・。魔物だもんね。食わないよね普通。今のところ魔物を食べる人って1人しかあったことないもんなー……。

今日のは血が赤いんでお夜食にしますよ。昨日のは紫でした。紫は毒があるんだよね。さすがに食べずに燃やしました。証拠隠滅

火の魔法で軽くあぶったあとにさつき調味料を勝手に頂戴しといたのでそれをかけて食べる。シンプルな調理法だがこれ位しか出来な
いんだよね。ああ凝った料理食べたいな。

むむ、意外においしい！見た目はかなりグロいけどこいつおいしい

な。予想外のおいしさに下の血の海を片付けるのも忘れて頬張る。うまつうまつ！と夢中で食べていたために私は全然気がつかなかった。背後に人がいることに。

何かの気配を感じて肉を頬張りつつ振り返る。

そこにはレイさん派の無口な騎士さんがいました。相変わらずの無表情だが少しビククリしている様にも見える。

まあ自分の護衛している人が夜中に魔物狩ってそれを食っていたら誰でも驚くわな・・・。

エ、エへ。思わず下を見る。そこには素敵な血の海&死に絶えた魔物がありました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんて言い訳しよう。

16ページ(後書き)

シーは基本ネーミングセンスがありません。前に友達の事笑ってたけど自分も無いです全然w

どうもこんばんはシーです。

私は今レイさんの部下さんと何故だか知らないけど焚き火を囲って魔物食べてます。

どうしてこうなったあああああ！！！！why?何故?なぜ?何でだよおおおお！

い、いや、落ち着くのをシー！ここで取り乱してはいけないわ！！
落ち着いて状況を思い返せばきつと原因が分かるはず！

確かそう、魔物狩りして素材剥いだ後にその魔物を食べてた。あまりのおいしさに夢中になって背後に人がいるのに気がつかなかった。んでようやく気配を感じて振り返ったらレイさんの部下がいた。ここで私はかなり焦ったのよね。ちなみに焦ったポイントはまず夜中に抜け出していること、魔物を食べていること、よりによって今まで交流ゼロのこの人が来たことなどなど・・・。もうとにかく焦っていた。そうだ、なのでどうにか現状を打破しようとして何か言わなきゃと思いつさに口にした。

「こ、こんばんはー。月が綺麗な夜ですねー。貴方も食べますか？」
.....

ここだ！明らかにここで失敗している。なんで誘っているんだ自分よ。ちゃっちゃと意識飛ばす魔法かければよかったのに。アホ！1

0分前の自分のアホオオオオオ！！
でもさ！食べるこの人もおかしいよね。魔物だよ魔物。普通拒否するわ。

ぬああああ、もう原因は分かったけどどうしようもないよ。
なんて言い訳しよう？

「魔物を退治してありましたのよ」とか？

いやそしたら何で食べるんだよって感じだもんな。

「退治した魔物は私が食べることによって浄化されますの」
苦しい！言い訳苦しい！浄化じゃなくて消化だよこれは。普通に胃袋に入ってるだけだもんね。あーどうしよう。

つーか会話の無いこの現状にそろそろ耐えられなくなってきた。
話しかけるにしてもこの人の名前も知らないしなー……。って名前聞けばいいんじゃない？

「あー……。貴方のお名前教えていただいてもいいですか？」
恐る恐る黙々と魔物の肉を食べていた彼に話しかける。この人本当に魔物食べるのに抵抗無いかね？だとしたらすごいな。

「……………ギルバート」

と小声でボソツと言って再び食べ始めるギルバートさん。

そんなにこの牛豚蛙おいしかったのかな？それともお腹空いてたのか？すっごい食べっぷりだもんな……。若干引くわー。

「ギルバートさんそんなにお腹へってたんですか？」

「別に。何で？」

おお！会話が成立したっ！！この人自分からは喋らないけどちゃんと答えてくれる人だ。なら一方的に喋っても大丈夫だな。

「いえ、すごい食べっぷりなので。それに魔物食べる人って中々いないですし……。なのにいっぱい食べてるので夕食足りなかったのかなと思って。」

「……………これ魔物だったのか？気がつかなかった。初めて食べるものだとは思ったが……………」

き、き、き、気づいてなかったんかいいいいいいいい！！！何この人鈍いわ！

あ……………これがトリップ小説に出てくる天然無口君ですね。分かりません。本当にいるのねこういう人って。しかもお約束のごとくこの人もイケメンだわ。イケメンで天然って……………おいしすぎるだろ！

つか、騎士団にはイケメン以外は入れないのかって位みんなイケメンなんだよ。鼻筋通っちゃててさ。くつきり二重でさ。あこのライオンもシャープでスッキリしててさ！。ちつくしょう！！普通はいいのかが普通は！

「イケメンに囲まれていいじゃない！」って思うかもだけど実際イケメンって遠くから見るといいですね。あんまり近くにいられると凹む。自分の顔の残念さに。美人は三日で飽きるって本当だったんだね！

「魔物って食べれるものだったんだな。」
おお、変な思考にはまってたらギルバートさんが話しかけてくれた。このひと無口かと思ってたけど意外と話せるのね。認識改めところ。

「ええ。血が赤いものは食べれますよ。紫や緑色の血の奴は無理です。あともちろん実体が無いものは食べられません。ていうか普通の

方は魔物食べないんですけどね……。」

「じゃあ何故食べてたんだ？」

え、そりゃ素材を剥いだついでです！って言っているのか？これはどうなんだ？

うーん……まあいつか。この人多分いい人だし。

「えっと魔物の素材集めてたんです。売れますんでこれ。んでそのついでに夜食にしようと思って。ギルバートさんは何してたんですか？」

「……なるほど。素材目的か。俺は食料調達から戻ってきたところだ。」

「食料？もしかしてこの旅の食料ってギルバートさんが用意してくれてたんですか？」

そう聞けば彼は頷いた。

「でも魔物が食べれるなら遠くまでいく必要はなくなる。動物はこの近くにいない。」

「いやだから普通の人は魔物食べませんから！！だめです！魔物はだめですから！！」

ほっといたらこの人きつと魔物を普通に出しちゃうよ。それはまずい。いろんな意味で。誰から知ったのかとか尋ねられたらこの人正直に私の名前を言うだろう。そしたらせっかく作ってる私のキャラ（アレンさん用）が無駄になるかもしれない。それは阻止せねば！そう考えて私は必死にこのことは黙っとくように説得を始めた。

結局、この後ギルバートさんに魔物が食べれることは2人の秘密に

するよつに約束させることができたのは太陽が昇り始めてからだ。
た。
天然って怖い。

とある町の宿で一人、少女がベッドの前に立ち尽くし感激で悶えていた。その顔は喜びにあふれていて下手したら泣きそうである。

「ああ、ベッドよ……。アレだけ夢見ていたベッドが目の前にあるなんて。感激だわ。奇跡だわ。」
感激で悶えていた少女、シーは幸運に浸っていた。

あーもうキャンプって楽しめるのは2日までだよー。それ以降はベッドの素晴らしさの方がキャンプの楽しさより勝るわやっぱり。そしてその素晴らしきベッドが目の前にある現状。素敵だわ。もう本当素敵。しかもこの宿町で一番いい宿みたいだしラッキー！

ギルバートさんと初めて喋った日の翌日（といっても結局朝日が昇ってから分かれたけど）いつもどおり馬車を走らせて途中止まってお昼ごはんを食べてから5刻は経っただろうかという頃に町に着いた。日はもう傾き始めていてだいぶ肌寒くなっていた。

町はルーカスさんの言っていた通り少し寂れているというか廃れていた。観光客は少なそうだしお店も静かで不気味な雰囲気で賑わってるとはいえない感じだった。

フェーン以外の町は初めて来たのでちょっと期待していただけに残念だった。

でもアレンさん達がこの町で一番いい宿をとってくれたみたいなのでぶっちゃけ町がどうなってようと関係ない。宿が綺麗ならそれでいいのだ。ベッドがあって屋根があればそれでいいのだ。

ちなみに宿の部屋は私が一人部屋（しかも一番いい部屋）、レイさん、ギルバートさん、ルーカスさんが1部屋、あとの騎士達も2部屋を6人で使っているみたいだった。これは夕ご飯のときに確認しました。ちなみに夕食は夕々に料理を食べたな！って感じで感動しました。まあアネットさんの料理には劣るけどね。

そっぴいや私レイさん、ルーカスさん、ギルバートさん、アレンさんとニコラスさんしか名前覚えてなかったな。だってみんな漢字じゃなくて横文字なんだもん！覚えにくいんだもん！まあ実際の3人さえ覚えておけばいいかな！なんて考えてますけどね！。私の脳はそんなに記憶できないから必要最低限しか覚えれないのさ！
・・・こういう言い方だと3人以外が必要ないように聞こえるかもだがそこはノーコメントで。

ってこんなこと考えている暇があったら早くベッドに寝転ぼう。
バフンツと勢いよく音を立ててベッドに飛び乗る。

むふふ、フツカフカやん！めっさごっさフツカフカー！ー！やっばベッド最高！寝袋は長期間は駄目だわ！。

しばらくゴロゴロして文明のありがたさに浸った後にこれからどうするかを考える。ちなみに時刻は19刻。規則正しい生活をしている人はもう寝ているくらいだ。

まあ考えられる選択肢は

- 1 このまま宿でゆっくりして体を休める
- 2 騎士達と交流を深める
- 3 町に繰り出す

くらいですかね？

うーむ1はそんなに疲れてないからな！。

2は移動中でもできるから却下。時間がもつたいないもんね。じゃあ3しかないかね？でも町に行くなら騎士と一緒に嫌だよな。

というか町に下りるなら魔物から剥いだ皮とか売るつもりだから駄目だ。

でも騎士達が笑顔で1人で送り出してくれるはずも無い。絶対護衛（という名の見張り）つけるよな！。撒くこともできるけどそうしたらそうしたで後がめんどくさそう。

ふー……。じゃあ残された道は一つしかないよね。まあしょうがない。一つしかないんだもん。私悪くないもん。しょうがないもん。

20刻ちようど。

私は心の中で「しょうがない」を連発しながら部屋にカモフラージュの結界を張り麻袋に今までゲットした素材をつめてこっそりと窓から抜け出した。

その姿に気づくものは誰もいなかった。

閑話 聖なる日（前書き）

クリスマスということでは閑話を入れてみました。
この話はシーがフェーンにいたころの話です。
グツダグツダになる予感がします・・・；

閑話 聖なる日

「聖なる日？なんですかそれ？」

朝起き抜けにアネットおばさんに「今日は聖なる日だからいつもよりおめかしなさいよ。」と言われた。聖なる日って初めて聞いたぞ。響きからいってクリスマスっぽいけどそんな感じかね？ちょうど季節も冬ですし。

「シーお前聖なる日知らないのか？さすが異世界から来ただけあるな・・・。これを知らないなんて。」

そんなこと言われても知らないもんは知らないっす。常識無いみたいに言わないでほしいわー。

「しょうがないじゃないですか。知らなくても。で、それって何なんでしょうか？髭のついた赤い服のおじさんが子供にプレゼント配って回ったりするんですか？」

「は？赤いおじさん？そんなんじゃないぞ。聖なる日はなあ「聖なる日は星が一番綺麗に見える日で神様をお願い事をかなえてもらえるように空に祈りをこめる日だよ。」

ドミニクさんのセリフの途中にアドルフくんが割り込んできました。ドミニクさんが「なあ」の口で固まっていてかなり面白いことになっている。顎外れそうだよドミニクさん・・・。

「アドルフ、おめー今俺が話してたろーが！まったく・・・。」

「ごめん。でも兄さんのたどたどしい説明よりはうまく説明できる

よ僕のほうが。」

ドミニクに130のダメージ！ドミニクは死んでしまった。
なーんて文字が見えそうならいドミニクさんが凹んでいる。まあ
弟にそんなこと言われちゃショックだけど。

そんな瀕死のドミニクさんは放っておいてアドルフ君に質問する。

「お祈りする日って祈るだけなの？なんかしないの？」

「この日は大体近所の人たちで集まってパーティーしたりするよ。
子供達はおめかしして大人たちからお菓子をもらったりするんだ。
大人は大体お酒飲んでる。それでね皆でケーキを食べるんだけどね
そのケーキの中の1つにコインを入れておくんだ。そのコイン入りの
ケーキに当たった人はプレゼントがもらえるんだよ。」

何そのいろんな地球のイベントの良いところいっぱい詰め込んだ感
じの行事は。盛りだくさんだな・・・。

「あとね、主都とか大きな街になると街全体でお祭りしたりするみ
たい。その日は皆早めに仕事切り上げてお祭りに参加するんだって
あと・・・」

アドルフくんは普段あんまり喋らないけど喋りだしたらすごいです。
知識量が多いのでめっちゃ話が長くなる。なので割愛。

アドルフ君のありがたいためになる長い話よりとりあえず楽しそう
なイベントであることが分かった。パーティーとかほとんどしたこ
と無いからめっちゃウキウキするわー。

「とりあえず楽しそうだね！パーティーは夜からなんだよね？楽し
みだなあ。」

「酒追加しろ酒ー！今日は飲むぞ！」

「お前はいつも飲んでるだろーが！」

ガハハハと豪快な笑い声が響く。

パーティー会場となったアネット食堂は主に酔っ払った大人たちによって賑わっていた。子供のほうが静かってどうなの……。

今はパーティーの終盤。子供達はたくさんお菓子をもらって大満足している。私も子供っていうほど子供じゃないけどいっぱいお菓子をもらってしまった。嬉しいけど全部食べたら虫歯になりそう……。

ちなみにメインイベント(?)のケーキに入っているコインはアドルフくんがゲットして試してみんなから山ほどプレゼントをもらっていた。今はそのプレゼントに埋もれて頭頂部しか見えなくなっている。あんな状態になるくらいなら外れたほうがマシかもなんて軽く考えるくらいにアドルフくんは疲れていた。ご愁傷さまです。

私は会場が見渡せる隅のほうで料理を咀嚼しながらあたたかい気持ちになっっていた。

ワーギヤーいいながら騒いでいる騎士団やそれを溜め息つきつつ見守るアネットさんたち母親、騎士団に負けないくらいにうるさい町のおじさん達、お菓子を頼張る子供……。

どこを見てもあたたかい、優しい空気に包まれていた。

自分がいた冷え切った家族とは全然違う空気だった。他人なのにこんなにあたたかいなんてなんて素敵なんだろう。

私この町に落ちてよかったなあ。この世界に来たことが嬉しいとは思えないし、元の世界に帰る予定だけど、この町にいれて幸せだとは思う。本当によかった。

このあたたかい日々が、幸せな日々が続くようにと私は神様に祈った。

「おいシー！そんなところでポケッとしてないでこっち来いよ！」
感傷的な気持ちになってたらすっかりベロンベロンのロウフに呼ばれる。

私は完璧に出来上がっているロウフに苦笑しつつあたたかな輪の中に入ってしまった。

閑話 聖なる日(後書き)

うん、オチもたいしてない、よくわかんない話になってすみません。
.....;

皆さん良いクリスマスをお過ごしください！

「ふーん中々いい品質だね。こんなのどこで手に入れたのお嬢ちゃん。」

現在、店先に【毛皮、ツノ、魔石その他なんでも買い取ります】って看板がかかっていた出店にて素材売り払っている真つ最中です。店は適当に選んだのでよく分からない。が、ここからが腕の見せ所だ。アネットさんや旅人&冒険者さんたちから教わった上手な交渉術を試していくぞ！！

？決して相手に弱気な態度を見せるな！

「ふふ、この店はどこで手に入れたか教えないと買い取ってくれないのかしら？なら他に当たらせていただきますけど？」

あ、あれ？強気っていうかなんかキャラが変わった……。このままだと女王様コース一直線な気もする。まあ今更やめられないけどね。

「おや、悪かったね聞いちゃいけないことだったかい？そんなこと言わずにもう聞かないからここで売ってってくれよ。」

「そうねえ、まあ値段にもよるかしら？で、おいくらで買う気なの。」
この店は当たりかなー？だったらいいんだけど

「そうだね、中々上等だが少し傷がついてるからなあ……。全部で10000キサでどうだい？」
10000キサねえ。。。。

ちなみに『キサ』はお金の単位。1キサが1円って感じですよ。安めの屋台なら300キサ位でのご飯食べれちゃう。なので10000キサは結構贅沢できる。できるんだけど……。

とりあえずこんな心境は顔に出さずにリアクションをとってみる。

「まあ！10000キサ！？本当に？」

「ああ、本当だとも。では交渉成立でいいのかな？」

「ええ、もちろん！」

そういつて微笑を浮かべる。すると店員も笑顔も浮かべてお金を取りに奥に入ろうとする。

さて、ここで交渉術？どんな条件でもはじめに出されたものには納得するな！

「……………なーんていうとでも？ふざけるのも大概にしてくださらない？」

笑顔を消して店員を見る。すると店員もさっきまで浮かべていた明らか営業用スマイルを消してこちらを見る。

「ふざけているってどういう意味かなお嬢ちゃん？」

「あら？そのままの意味ですけど。言葉も理解できないんです？これが10000キサってふざけている以外の何ものでもないですよ。私わたくしがそれで納得すると思います？」

うつわー完全に女王様だよ……。これはアレンさんたちの前でずっと演技してるから変な癖が出てきたんだ、絶対。一回始めたらなりきっちゃうんだよ最近。おかげでルーカスに笑われっぱなしだよ！でもま、いいさ今は役立ってるからね。明らかに店員さん動揺し始

めてるし今畳み込むしかないね！

交渉術？嘘をつくなら突き通せっ！

ということですから私うそつきです！すみません！！

「お嬢ちゃん、君にとっては10000キサ以上の価値かもただけど世間的にはこんなもんなんだよ。むしろうちでは高めに買い取ってるんだけどねえ……。さ、いまならまだおじさんも許してあげるからね。交渉成立でいいかな？」

「ハア！。だから何度言わせる気ですか？その値段じゃ私の素材とは釣り合いません。少なくとも貴方達の提示した金額の10倍はするんですよ？その位ご存知だと思ってこのお店にしたのに。」
「はい嘘です。10倍するのかなんて知りませんけど何か？
100000キサっていうのは私の願望です。そんな位稼ぎたいからです。すみません店員さん。反省はしています。でも後悔はしてない！！」

「100000キサって……。お嬢ちゃんこそふざけてるのか？
っていう店員さんの顔に怒りと少し焦りが見える気がする……。え？まさか本当にそんなに価値あるの？これって？」

「ふふ、私は正気ですよ。貴方こそ嘘をつくならもう少し表情の練習してからのほうがいいですよ？顔に書いてありますもの。本当は100000キサどころじゃなく1000000キサ以上の価値ありますって。」

半笑いで言ってみた。

すると店員が怒りで顔をカァツと染めたと思っただら叫びだした。

「この餓鬼が！下手に出てたら調子乗りやがって。そうだよ、お前が言うようにこの素材たちにはすごい価値があるんだよ！それをみすみす逃してたまるか！！オイ、お前からこのがきどっかに連れて行け！売り払ってもいいぞ。好きにしろ。」

店員がそんなことを言っているとき私は、すげーこの人。完全に漫画とかに出てくる『町のチンピラA』だよ。すぐにキレる事といい、セリフといい、価値についてペラペラ喋っちゃうところといい完璧だよ……。ある意味尊敬しちゃうよ。とか考えていた。

だって実際、このやられキャラ共にだったら5秒で勝てる自信あります！だってチートですから！

と余計なことを考えていたらチンピラB（シー命名）が私を捕らえようと近づいてきた。しょうがない、魔法使うか！。今日は寒いから水系はやめようと思いかぜの魔法を使おうとしたらチンピラBが沈められてた。

あれ？まだ私何もしてないですよ？なに持病の心臓発作でも起きましたか？

って誰がBさんの側にたたずんでるー。その人明らかにBさんの仲間じゃないオーラが出てるよ。チンピラとは呼べないこう、なんというかスターな感じのオーラが。

「どうしたいきなり？・・・！？お前誰だ！いつからそこにいたっ！！？」

おや、チンピラAさんが疑問を全部口に出してくれました。さすがやられキャラ！

「……………」

スターさん（仮）は黙ったままだ。黙っているのもスターっぽいね。

「っ何かいいやがれ！！この！！！！」

19ページ(後書き)

活動報告始めました！良かったら見てください^^

「いやー助けてもらった拳句お店の紹介までしていただいてすみません。」

「気にするな。さっきの連中はいつか追い出そうと思ってたんだ。丁度良かったといっっては何だが切り込む口実ができて助かったよ。」
そういってランスロットさんが笑う。さっきのチンピラの前とはまったく雰囲気違ってこれまた素敵である。

現在私は先ほど助けていただいたランスロットさんにちゃんとした買い取りをしてくれるお店に案内してもらってます。

ランスロットさんはこの町を拠点としている冒険者さんらしい。さっき証明書を見せてもらった。言われてみれば格好がもる冒険者だったんだけどね。

冒険者の人は黒を基調とした服を着る。そこで全国各地にあるギルドのどこかで名前を登録してランクをつけてもらい身分証明書みたいなものをもらう。その証明書を持っていればどこのギルドに行っても一発でどんな人だか分かるんだって。便利だわー。その登録でもう冒険者らしい。なので冒険者はいつぱいいる。まあ1年間に決められた回数依頼をやらなかったり、規則破ったりすればギルドから名前消されるらしいけどね。

あ、拠点っていうのは初めに登録したギルドがある町のことですか大切なこと、例えばランクアップの試験とかの時は自分の拠点に戻らなきゃいけないんだって。私は冒険者じゃないんでこれ以上詳しいことわかんないけどね。

ちなみに後知ってるのは冒険者ランクのこと。ランクは最低がGランクから最高がSランクまである。今のところSランクの人は1人しかない。Aは4人。Bは18人でなんとランスロットさんもBランクらしい！A、Sの後に聞くと少しショボく聞こえるがBランクもかなりすごくてほとんどの人はすごいがんばってもCにいけない人も多いらしい。すごいわー。ランスロットさん。私ファンになりましたよマジで。

「ところでシーちゃんは一人でこの町に来たのか？」

ランスロットさんに見とれてたら（彼もかなりのイケメン。歳は30前半くらいで少し渋めな感じがまたかっこいいです）話しかけられる。

久々にちゃん付けで呼ばれて何や嬉しくなる。こういう風に普通に話すのやっぱりいいな。だから巫女姫のことは黙っといたほうがいいよね。ランスロットさんに嘘つきたくないけど仕方あるまい。それに信じてくれない可能性のほうがかいしね。

「いえ、ちゃんと連れがいますよ。でも彼ら魔物に襲われちゃって・・・。そんなに重症ではないんですが大事をとって今宿で体を休めてるんです。皆私をかばいながらだったから怪我しちゃって。だから私少しでもみんなによくなって欲しくて前に知り合いにもらったこの素材達を売ろうと思ってたんです。」

あ、あれえ？連れがいるんですだけ言おうとしたのに口から次々と言葉を発してしまったぞ！？自分でびっくりだわ。何この嘘・・・。魔物に襲われるって言うか私が魔物襲ってましたけどね！

「そうだったのか・・・。大変だったな。でも一人で歩くのは危険だから気をつけたほうがいいぞ。お、丁度ついたよ。ここがその店だ。」

そういつてランスロットさんが指差したお店は少しレトロな雰囲気

ただどかわいらしい店構えのお店だった。

「シェリー！邪魔するぞ。客を連れてきた。」

そう言いながら慣れたように店に入るランスロットさんの後に続く。実はさつき入り口に本日休みますって紙が見えたんだけどそれはよかったのか・・・？

「ランス、今日は休みよ。まったく・・・。」

「まあそう言うな。道具屋のほうの客連れてきたんだからさ。」

「あらお客さん？その可愛らしい子の何かしら？」

「ああ、彼女はシー。あの出店構えてた奴らの店で絡まれてたから連れて来た。お前のところなら信用できると思っつてな。」

店のカウンターに座っていたシェリーと呼ばれた女性は私を見ながら妖艶に微笑んだ。

「・・・やっぱこの世界って美形しかいないんだろっ！そうなんだろうっ！なんだあのものすごい色気たつぷりの美女は！！！！ちつくしよ何だよあのスタイル。もやは罪だろう！思わず自分の胸を見た私は通常なはず。誰だっつてやるさ彼女を前にしたら。ってくらいのスタイルです彼女。ああ、なんかもう女として全て負けた気がする。」

内心ではこんな風にかなり勝手にいじけつつも挨拶をする。

「はじめましてシーと申します。おやすみなのに申し訳ありません。」

「あらぁーランスが連れて来たにしては礼儀がいいわねー。好きよ

そういう子は。私はシェリー。この酒場兼道具屋をやってるわ。よろしくね。」
「い、いちいち色っぽいですシェリーさん！好きよってさらっと言われただけで赤面しそうだわ！
あーもう駄目だ。この色気見てたら本当に自分のシヨボさに死にたくなってしまうので早速だが本題に入ろう。」

「こちらこそよろしくお願ひします。それで早速なんですすが買い取っていただけますか？」

そう言いながら素材達を取り出してカウンターに置いた。
するとそれを見た彼女が「まあ！」と少し嬉しそうに驚いた声を出して査定し始めた。

8分くらいだろうか、結構念入りに査定したらしい彼女が驚きの金額を提示した。

「すごい珍しい素材だね。それに状態もいい。ざっと軽めに見積もっても700000キサはいくわね。ふふ、うちに売ってくれてありがとうシーちゃん」

語尾に音符つけながら彼女は心底嬉しそうに言った。

「つか、え？ナナジユウマンキサ？ななじゅうまんきさ？700000キサ？」

「な、ななな700000キサア！！？」

大声で叫んでもしょうがないと思う。

大声で叫んだ私にシェリーさんが答える。

「そうよあー。700000キサよ。」

「それはすごいな。そんなに価値のあるものだったのか。」

ランスロットさんとシェリーさんは話を進めているが私は叫んだ状態でフリーズしてしまい動けなかった。思考も止まったままである。

「ええ。この類の毛皮は貴族に大人気なのよ。でも中々このレベルの魔物をしとめられる人がいないのよね。さらにこういう魔物の数も少ないから希少価値も高いつてわけ。さっきも言っただけど700000キサも安めに見積もったのよ。」

シェリーさんの説明でようやくフリーズ状態から抜け出した私は気になったことがあったのでシェリーさんに質問してみた。

「あの、貴族に人気なんですか？貴族は魔物をめっちゃめっちゃ嫌ってるんですよ？なのに毛皮は使ってますか？」

貴族というか上流階級の人は魔物や魔族が大嫌いらしい。よって魔族などが好む色である黒やそれに準ずる色も嫌っていて夜会とかそういう感じのものに黒いドレスを着ていたら袋叩きにされるんだって。おー怖っ。そういうのには関わりたくないなあ。

ああ、そうそう魔族って言うのは魔物がより人間に近くなったやつのことだ。見た目は人間と変わらないんだけどあくまで魔物の進化

系って感じである。人間の要素が4で魔物要素が6つてところかな。でも魔物と違ってちゃんと考えて行動するからよりタチが悪いってドミニクさんが言ってたなあ。ちなみに魔物よりは全然数が少ないらしい。ま、なんにせよこいつらにも関わりたくないね！

「ええ、そうなのよ。貴族の人たちは魔物の毛皮とかは普通に使うのよねえ……。そのくせ黒色とかは嫌うんだけど。よく分からないわよね。」

シエリーさんが苦笑しながら答えてくれた。苦笑すら色気が漂うつてもう何なんですか！何すればその色気は消えるんだよ。私てきには多分彼女の場合ならどじょうすくいをやっても色つばいと思うよ！！

「ふんつまあ、お偉いさん達は実際なんでもいいんだろ。自分を強く、美しく見せられさえすれば。」
ランスロットさんが吐き捨てるように言った。

おや、今の反応からしてランスロットさんは貴族が好きじゃないんだろつか？まあ私もあんまり好きじゃないんだけどね。だったら早く話題を転換したほうがいいよね。ランスロットさんを気分悪くさせるなんて思い罪だもの！

「そうなんですか。教えてくれてありがとうございます。それで買い取っていただけるんですよね？」

「もちろんですよ！ぜひ買わせてもらおうわ。んーじゃあ毛皮、牙2つあわせて750000キサでいいかしら？」

「はい！お願いします。」

私がそう答えるとシエリーさんはジュースらしきものを私とランスロットさんに出した後にお金を取りに店の奥に入っていた。

私は出されたオレンジジュースもどきを飲みながらこの後どうするかを考えていた。

実はあの詐欺罪でつかまりそうな出店で起きたことのせいで時間を結構食ってしまったのだ。宿から抜け出す前に絶対22刻には戻ろうと決めていたのであんまり時間は無い。自分で決めたことなので破っても別に何かあるわけじゃないけどどうせならその時間までに戻りたいと思っっている。

今は21刻をまわったところ。あと約1時間。何をしようか？1時間で楽しめるところ……。うーん思いつかない。というか私はこの町のことを知らないのどうしようもないのだ。

「あの、ランスロットさん。少しお聞きしたい事があるんですけどいいですか？」

考えても分からなかったので聞いてみることにした。

「ん？なんだ言ってみる。あ、あと俺のことはランスでいいぞ。長いだらう？ランスロットじゃ。」

そうはにかみながら言うランスロットじゃないランスさんはものすごかつこよかったです。は、鼻血でそう。きつと今顔赤いぞ私。

「あ、ありがとうございます。それでえつと聞きたいことというのは私あと1時間くらい時間を潰さなきゃいけないんです。なのでどこか私のような子供でも1時間くらい過ごせるところ知ってませんか？」

自分で子供っていうのはいやだったけどランスさんやシェリーさんの態度から言っただけ私絶対ちっちゃい子だと思われると思う。やっぱり異世界トリップ王道の日本人は童顔説は本当なんですね……。切ない……。

「んー、シーちゃんでも過ごせるところか。そうだなあー。……

「……あ、冒険者ギルドに来てみないか？あそこなら俺が信用できる奴もいるし食べ物も出るし1時間くらいなら潰れると思うが。どうだ？」

「ぼ、冒険者ギルドですってえ！？なんて素敵な響きなんでしょう。行きたい。絶対行きたい。実はフエーンは辺鄙な町だったので冒険者ギルドが無かったのだ。なのでたまに依頼を受けた冒険者が来るくらいしか冒険者に会えなかったのだ。だからあんまり冒険者に関する知識が無いんだよねー。ちなみにある意味ギルドが町に無いことはすごいことらしい。全然嬉しくないすごさだけだね！」

「い、いいいいいい行きたいです！！めっちゃくちゃものすっごく行きたいです！！！！！」
「そう力強くどもりながら言ったらランスさんはちょっと驚いたあと笑った。」

「ハハッ。そんなに行きたいなんて変わってるなあ。よしっじゃあシエリーから金もらったら行くか！」

「へ？ランスさんも一緒に行ってくださいるんですか？」

「おう。そのつもりだが、嫌だったか？」

「いえ、全然、まったく、これっぽちも嫌じゃないです！むしろ嬉しいです。感激です。でも先ほどから迷惑かけっぱなしなんで……」

「現在進行形でお世話になってるからね。申し訳ない。」

「なんだそんなことか。全然迷惑じゃないって言ってるだろう。それに俺はシーちゃんといれて楽しいしな！」
「おっとこ前すぎますランスさん。そして笑顔と共に放った最後のセ

リフに鼻血でそうです。何その殺し文句。かつこよすぎるわー！！！
何はともあれランスさんと冒険者ギルド行きが決定しました！どん
なところなんだろう？楽しみだなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8852y/>

召還者の異世界奮闘日記

2011年12月29日17時39分発行